福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1346 集

箱 崎 56

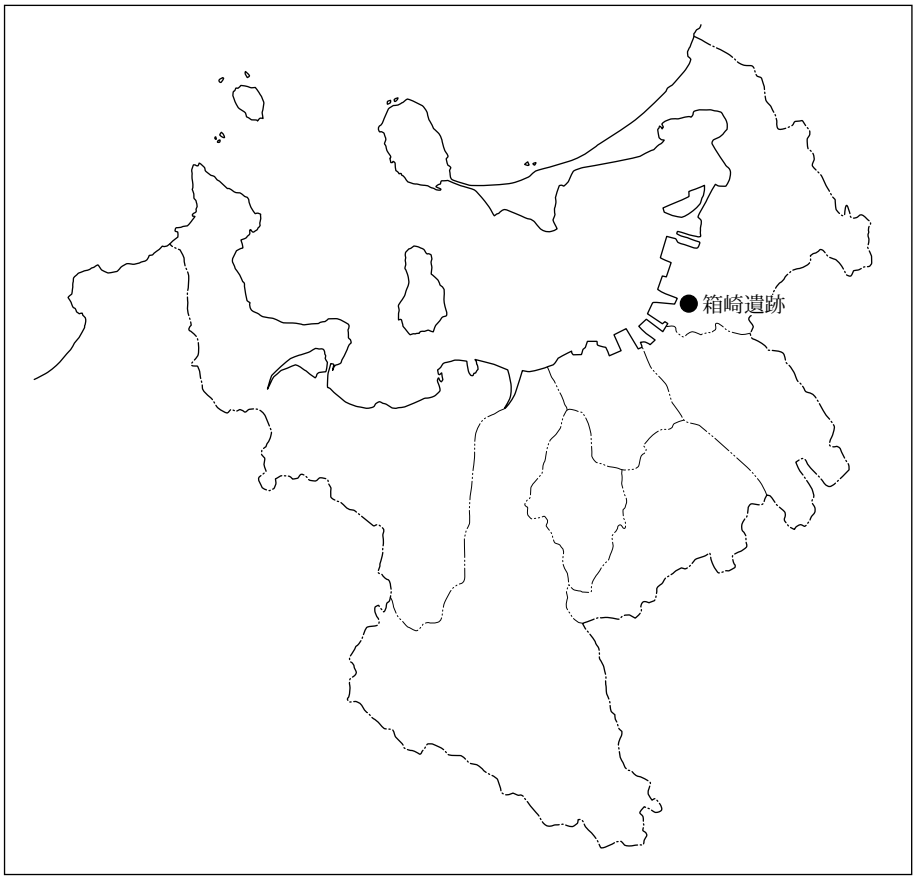
― 箱崎遺跡第 78 次調査報告 ―

2018
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1346 集

箱 崎 56

― 箱崎遺跡第 78 次調査報告 ―



遺跡略号　HKZ-78
調査番号　1538

2018
福岡市教育委員会

序

福岡市は、古来より大陸文化の門戸としての役割を担い発展した歴史をもち、地中にはそれらを物語る文化財が多く点在しています。本市ではこれら文化財の保護に努めているところではありますが、各種の開発事業によってやむを得ず失われる文化財に関しては、事前に発掘調査を実施して記録保存を行うことで後世に残しています。

本書は、共同住宅建設に伴い、東区箱崎 1 丁目で実施した箱崎遺跡の第 78 次調査の報告です。箱崎遺跡は筥崎宮周辺に栄えた古代から中世を中心とする遺跡で、特に中世においては都市的な発展を遂げたことが明らかになっています。今回の調査では当該機の遺構・遺物を多く検出した他、それに遡る古墳時代の遺構も確認しており、本遺跡の全体像を推察するための多くの手がかりを得ることができました。

本調査の成果が文化財保護への認識と理解を深める一助となるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査に際してご理解とご協力をいただきました株式会社クレ・コーポレーション様をはじめとした関係者の皆様に心から感謝の意を表します。

平成 30 年 3 月 26 日

福岡市教育委員会
教育長　星子　明夫

例言

1．本書は、福岡市教育委員会が平成 28 年 1 月 25 日から平成 28 年 5 月 24 日まで東区箱崎 1 丁目で実施した箱崎遺跡第 78 次調査の発掘調査報告書である。

2．遺構は、井戸を SE、土坑を SK、溝を SD とそれぞれ記号化し、すべての遺構を 01 から通して番号を付した。、柱穴は、調査区の任意のグリッドを 1 つの単位とし、グリッドごとに 01 から通し番号を付した。

3．本書で使用した方位は、すべて国土座標北（世界測地系）である。

4．本書に掲載した遺構実測図は早田有輝子、中尾祐太による。

5．本書に掲載した遺物実測図は大庭友子、米倉法子、中尾による。

6．本書に掲載した遺構写真撮影、遺物写真撮影、製図、執筆、編集は中尾による。

7．本書に掲載する遺物の分類に関しては、主に以下の文献を参照した。

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』九州近世当時学会 10 年記念

楠瀬慶太 2007「土師器食膳具からみた中世博多の土器様相 - 博多遺跡群の土師器編年 -」
『九州考古学』82　九州考古学会

太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊ＸＶ － 陶磁器分類編 － 』太宰府市の文化財第 49 集

山本信夫 1990「統計上の土器 － 歴史時代土師器の編年研究によせて － 」『九州上代文化論集』
乙益重隆先生古希記念論集刊行会

8. 本書にかかわる記録と遺物は、整理後福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、管理・活用する。

調査番号	1538	遺跡略号	HKZ-78
調査地	東区箱崎1丁目2032-2	分布地図図幅名	034
申請地面積	409.91㎡	開発面積	250㎡
調査実施面積	270㎡	事前審査番号	27-2-346
調査期間	平成28年1月25日～平成28年5月24日		

本文目次

Ⅰ　はじめに 1
１．調査にいたる経緯 1
２．調査の組織 1
３．遺跡の立地と歴史的環境 2
Ⅱ　調査の記録 5
１．調査の概要 5
２．遺構と遺物 6
（１）１面上整地層（道路状遺構）の調査 6
（２）１面・２面の調査 6
井戸　溝　土坑　遺構覆土・遺構検出時・ピット・包含層出土遺物
（３）３面の調査 32
土坑　包含層・遺構検出時・ピット出土遺物
（４）　その他の出土遺物 35
石製品　金属器　攪乱出土遺物
Ⅲ　小結 38

挿図目次

Fig1　周辺遺跡分布図（1/50,000） 3
Fig2　箱崎遺跡各調査地点位置図（1/5,000） 4
Fig3　第 78 次調査地点位置図（1/1,000） 5
Fig4　1 面上整地層平面図および 1 面遺構配置図（1/200） 6
Fig5　2 面遺構配置図および 3 面遺構配置図（1/200） 7
Fig6　調査区基本層序（1/40） 8
Fig7　SE01 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3） 10
Fig8　SE26 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3） 11
Fig9　SE65 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3） 12
Fig10　SD28・43・49 実測図（1/40）および SD49 出土遺物実測図（1/3） 13
Fig11　SK03・04・05・06 実測図（1/40）および SK05・06 出土遺物実測図（1/3） 14
Fig12　SK09・10 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3） 15
Fig13　SK12・14・15 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3） 16
Fig14　SK16・19・27 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3） 17
Fig15　SK29 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3） 18
Fig16　SK31・32・33 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3） 19
Fig17　SK34 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3） 20
Fig18　SK36・38・39・40 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3） 21

Fig19　SK41・43・44 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）22
Fig20　SK50 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）23
Fig21　SK51 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）24
Fig22　SK52・53 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）25
Fig23　SK54・56 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）26
Fig24　SK59 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）27
Fig25　SK61 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）28
Fig26　SK62 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）29
Fig27　SK63 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）30
Fig28　1 面および 2 面遺構覆土・遺構検出時・ピット・包含層出土遺物実測図（1/3）31
Fig29　SK22・23 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）32
Fig30　SK24・25 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）33
Fig31　SK46・48・64 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）34
Fig32　3 面遺構覆土・遺構検出時・ピット出土遺物実測図（1/3）35
Fig33　出土石製品・金属製品実測図（1/3）および銅銭 X 線写真・拓本 (縮尺任意)36
Fig34　攪乱出土遺物 (1/3)37
Fig35　土師器集積遺構配置図 (1/300)39
Fig36　畿内系土器の分布 (1/10,000)39

図版目次

PL1　1　調査第 1 区 1 面全景（南東から）　2　調査第 1 区 2 面全景（南東から）
　　3　調査第 1 区 3 面全景（南東から）

PL2　1　調査第 2 区 2 面全景（北西から）　2　調査第 2 区 3 面全景（北西から）
　　3　調査第 3 区 2 面全景（北西から）　4　調査第 3 区 3 面全景（北西から）

PL3　1　1 面上整地層検出時（西から）　2　SD02（道路側溝）（西から）
　　3　SK03・04 土層断面（南東から）　4　SK31 遺物出土状況（北から）
　　5　SK33 遺物出土状況（北東から）　6　SK50 遺物出土状況（南から）
　　7　SE65 完掘状況（南西から）　8　SK64 遺物出土状況（北東から）

PL4　1　SK10 出土遺物（47）　2　SK10 出土遺物（65）
　　3　SK14 出土遺物（71）　4　SK32 出土遺物（111）
　　5　SK22 出土遺物（318）　6　SK24 出土遺物（324）
　　7　SK64 出土遺物（332）　8　攪乱出土遺物（372）

Ⅰ　はじめに

１．調査にいたる経緯

福岡市教育委員会は、同市東区箱崎１丁目 2032 － 2 における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成 27 年 7 月 7 日付で受理した。

これを受けて埋蔵文化財審査課は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に含まれていることから確認調査を実施し、現地表面下 30cm で遺構が確認されたため、遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、予定建築物の建物範囲について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成 28 年 1 月 13 日付で株式会社クレ・コーポレーションを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年 6 月 13 日から発掘調査を、翌平成 29 年度に資料整理および報告書作成を行うこととなった。

２．調査の組織

調査委託：株式会社クレ・コーポレーション
調査主体：福岡市教育委員会
発掘調査：平成 28 年度・資料整理：平成 29 年度

調査総括：	文化財部埋蔵文化財調査課（現・埋蔵文化財課）	課長	常松　幹雄
		同調査第２係長	榎本　義嗣 (27 年度)
			加藤　隆也 (28 年度)
			大塚　紀宜 (29 年度)
調査庶務：	埋蔵文化財審査課（現・埋蔵文化財課）管理係	係長	大塚　紀宜 (27 年度・28 年度)
		同係	横田　　忍 (27 年度・28 年度)
	文化財保護課	課長	宮崎　誠二 (29 年度)
		管理調整係係長	藤　　克己 (29 年度)
		同係	松原加奈枝 (29 年度)
事前審査：	埋蔵文化財課事前審査係	事前審査係長	佐藤　一郎 (27 年度・28 年度)
			本田浩二郎 (29 年度)
		同係主任文化財主事	池田　祐司
		同係文化財主事	板倉　有大 (27 年度)
		同係文化財主事	清金　良太 (28 年度・29 年度)
調査担当：	埋蔵文化財課調査第２係	文化財主事	中尾　祐太

発掘作業：唐島栄子、桑原美津子、村山巳代子、中村桂子、桒野孝子、安東昌信、上野照明、鷲崎哲夫、遠竹卓馬、山田輝人、枦山恵子、阿部洪太郎、熊埜御堂早和子（山口大学学生）、早田有輝子（福岡女子大学学生）
整理作業：松尾真澄、木本恵利子

３．遺跡の立地と歴史的環境

福岡市の北を限る博多湾沿岸には、箱崎砂層と呼称される新砂丘砂層が堆積している。本砂丘は東区箱崎から室見川河口付近までのびており、形成時期は自然科学的におそくとも縄文時代晩期までと考えられている。砂丘は鞍部や旧河川などに分断されつつ微高地を形成しており、微高地上には、複数の遺跡が点在している。箱崎遺跡もこの砂丘上に形成された遺跡のひとつである。遺跡は東区箱崎～馬出にかけての南北 1000m 以上、東西約 500m の範囲に展開する。遺跡周辺の地形は現在と比較して、地形が大きく異なっており、現在の宇美川の河口付近まで入り江が大きく湾入していたと推定されている。これにより遺跡周辺は半島状の地形をなしていたと考えられているが、この旧地形は箱崎遺跡の出現、発展に大きく寄与したものと推定される。

Fig2 は、これまでに実施された発掘調査および確認調査で明らかになった砂丘面のレベルから等高線を推定したもので、2003 年以降使用されていた図をもとに、近年の調査結果を反映させたものである。詳細はこれまでの報告にゆずり、近年の発掘調査および確認調査の結果明らかになった部分を中心に概説する。遺跡の東側は現在の JR 鹿児島本沿い付近に推定されており、西側については 25 次調査地点・32 次調査地点の西側に設定されている標高 2m のラインがこのまま南西にむかってのびると推定されてきた。しかし、近年の発掘調査および周辺の確認調査の結果から上記推定とは大きく異なる地形であったことが明らかになった。遺跡中央部西寄りに位置する 67 次調査では、調査地点における砂丘検出レベルの比高差が調査区高所の北側と低所の南側で約 1m あることが分かり、報告者は調査地点の南側には谷部が存在していたことを指摘している。この結果を巨視的にみるとさらに興味深いことが分かる。67 次調査地点の南側では複数地点で確認調査を実施しているが、一帯においては中世にさかのぼる遺構がまったく確認されない範囲があり、さらにその範囲内においては、検出される砂層が、基盤層であるいわゆる砂丘とは異なり、滞水したものや粗砂層となる部分がある。それは現在までの確認調査の結果から箱崎小学校付近から筥崎宮北西部にかけて帯状にのびることが予想される。つまり、67 次調査地点を含む上記の範囲には、一定の規模の鞍部（鞍部 2）が存在していたということができる。この鞍部は従来指摘されてきた筥崎宮南東部のもの（鞍部 1）とは異なり、単に低地であるだけでなく、上記の堆積層から、絶えず水の流れがあったものと考えられる。この新たに明らかになった地形も遺跡を考えるうえで極めて重要な要素となるだろう。

本遺跡における本格的な集落の形成期は古墳時代で、丘陵東側の緩斜面に位置する調査地点で該期の住居や墳墓が確認されている。8 次調査では土坑から飯蛸壺が一括で出土している他、住居からも一定の飯蛸壺が出土しており、当時の湾岸集落の生業を考えるための興味深い成果が得られている。その後、奈良時代になると集落は断絶し、再び生活遺構が確認されるのは 10 世紀代で、以降中世を通して発展する。遺跡範囲内に所在する筥崎宮の創建が延長元（923）年と時期的に符合することから、生活域の出現と発展には同宮が深く関係していると考えられる。

10 世紀～ 11 世紀前半にかけての遺構は筥崎宮の南東側に集中する。10 世紀前半は、遺物とわずかな遺構が中心となるが、10 世紀後半になると生活遺構である井戸が検出されるようになり、11 世紀前半にかけて同地点で遺構が増加する。出土遺物にはイスラム陶器や石帯巡方、越州窯系青磁碗などがあり、一般の集落とは異なる様相がうかがえる。また、上記の遺物が出土する範囲と重複するかたちで瓦がある程度まとまって出土している。瓦は二次的に利用することも可能で、時期を特定するのは困難であるが、出土した瓦のなかには大宰府系、鴻臚館系の瓦が混入しており、当初の遺跡の性

格を考えるひとつの有用な遺物であるといえよう。黒色土器をはじめとして当該期の遺物は本調査地点でも多量に出土している。

以降、砂丘の発達も与し、生活遺構の範囲は徐々に拡大していく。11 世紀後半～ 12 世紀前半には、上記の生活域は継続しつつ、遺跡東側緩斜面を中心として遺構が検出される範囲が拡大するとされている。この時期前後の博多湾沿岸では、鴻臚館衰退に伴い博多遺跡群が貿易の中心地になることが既往の調査・研究で明らかになっている。この影響は箱崎遺跡にも表れており、この時期以降急増する井戸には中国商人や貿易との関係が考えられる桶を積極的に使用するようになる。また、墨書白磁を含む白磁も一定数出土しており、都市化の契機には上記の貿易体制の変革が深く関係しているものと想定される。その他の遺物としては、この時期前後の高麗青磁がまとまって出土する他、楠葉型瓦器碗に代表される畿内系土器も集中して出土することが明らかになっている。注目すべきは、これらの遺物の出土傾向がそれぞれで異なることである。上記の鞍部 2 以北では墨書陶磁器が集中し、楠葉型瓦器碗は筥崎宮の北側に集中する。楠葉型瓦器碗は筥崎宮北側に近接する本調査地点でも複数出土しているが、その量は既往の調査地点の中で最も多い。今後の調査の進展により、こうした遺物の分布傾向から構成集団の差を明らかにできる可能性もあるだろう。

12 世紀中頃～ 13 世紀は遺跡のひとつのピークで前代までの生活域は踏襲しつつ、遺跡内のほぼ全域で遺構が確認されるようになる。生活遺構を代表し、調査において最も検出遺漏が少ないと考えられる井戸をみると、極めて近い場所に同時期もしくは近い時期のものが複数基重複している例もあり、人口の集中および生活域の継続性をうかがうことができる。この他、遺跡の北側に位置する 10 次調査地点や 38 次調査地点では、鋳型や羽口、ガラス坩堝などの生産関連遺物が出土しており、以上の傾向を総合的にみれば、該期の遺跡は都市としての性格を付与できるだろう。本調査区の該期における井戸は周辺と比較すると少なく、土師器の集積遺構が多く確認された。上述した楠葉型瓦器碗の検出も考慮すると通常の集落とは異なる性格をもっていた可能性がある。なお、生産関連遺物は本調査地点でも検出されている。

13 世紀後半以降も遺跡内の全域に遺構が認められるが、特に遺跡西側緩斜面をより積極的に使用するようになることが明らかになっている。しかしながら、該期に中心となる遺跡西側は調査が進んでおらず、かつ狭隘な調査区が多いため、未だ不明な点が多い。

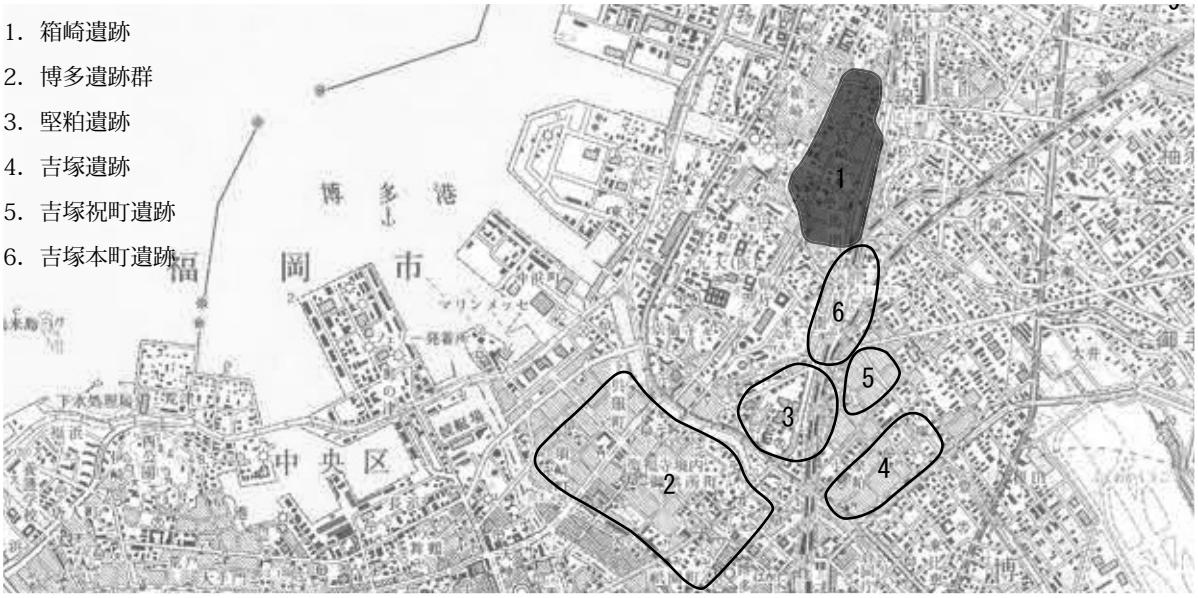


Fig1　周辺遺跡分布図（1/50,000）

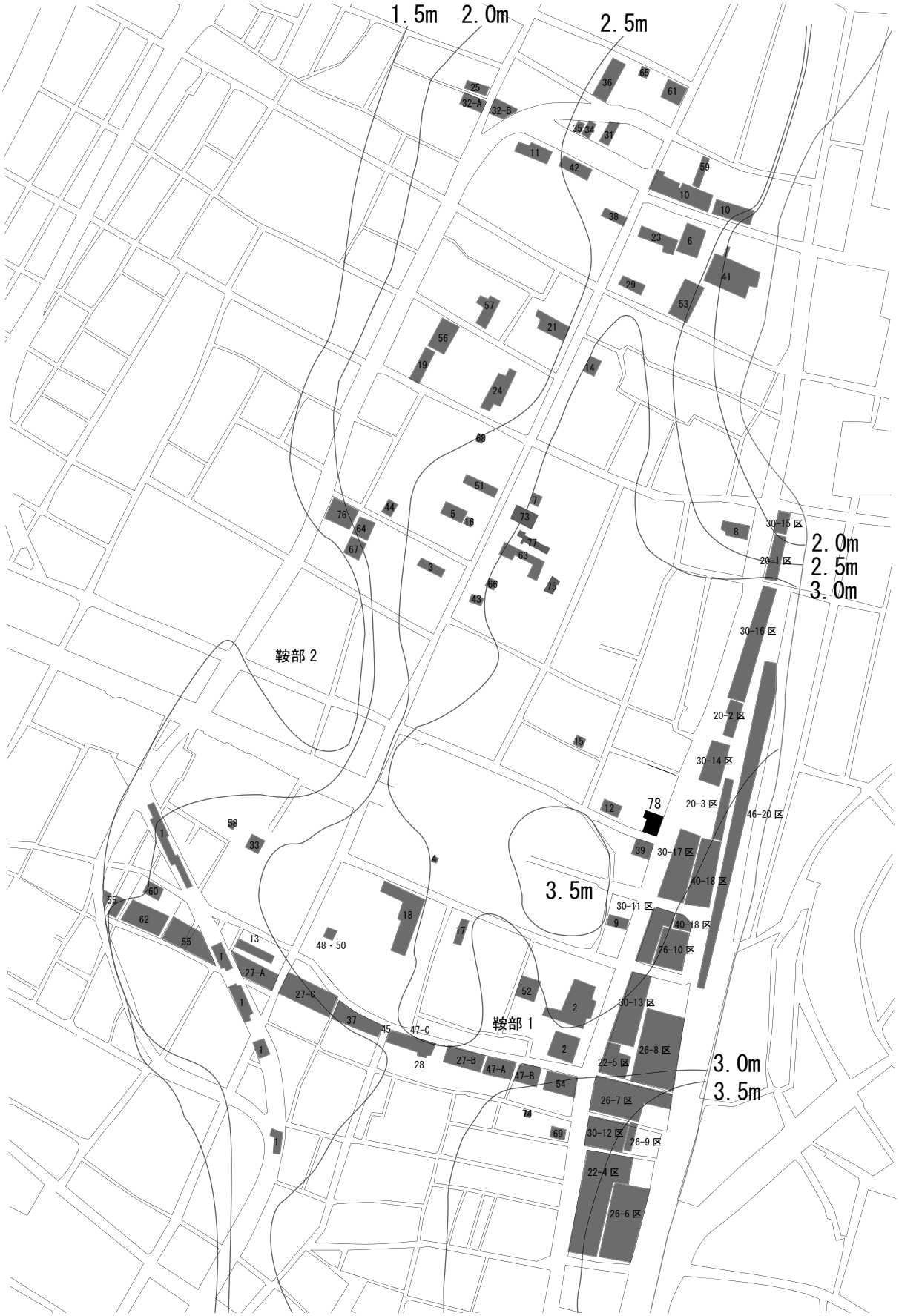


Fig2　箱崎遺跡各調査地点位置図（1/5,000）

Ⅱ　調査の記録

１．調査の概要

78 次調査地点は箱崎遺跡の南東部、砂丘東側緩斜面の安定した高所に位置する。周辺では複数次の調査が実施されており、西側には 12 次調査地点が、南側には 38 次調査地点が所在する。

本調査は敷地面積 409.91㎡のうち共同住宅建設に伴う土留めの範囲内で行った。調査面積は 270㎡である。

基本層序は Fig6 に示すとおり、基本的に表土直下で遺構面となるが、遺構面の残存状況は場所によって異なる。調査区の北側では表土下約 50㎝、標高約 3.5m 前後の高さで暗褐色砂質土層を確認。この面に掘り込みが認められたので、これを第 1 面として設定。土坑や井戸を検出した。第 2 面はこの下約 20㎝、標高 3.3m 前後の面に設定。本調査で検出した主要遺構のほとんどはこの面で確認している。その下 20 ～ 30㎝程度で基盤層の黄色砂となり、この面を第 3 面に設定した。3 面では古墳時代の遺構を検出している。調査は基本的にこの 3 面で実施したが、調査区の北西側の一部では 1 面の上層に良好な状態で硬化面が残存していたため、この面から調査を実施した (Fig4)。この面は土層観察などから道路ということが明らかになった（Fig6 土層 1 ～ 3)。

調査に先立ち、1 月 21 日、22 日に事業主協力のもと遺構面までの表土の鋤取り、および搬出を実施し、翌週 1 月 25 日に機材搬入と同時に調査開始。一定量の表土搬出を行ったが、確認調査から想定される排土量を考慮し、調査区を 3 分割して調査を実施した。調査第 1 区は調査区の北西部。上記の道路状遺構から順次調査を行い 3 月 13 日に 1 区の調査を終了。翌 14 日に表土の反転を行い、調査区北東部 (調査第 2 区) の調査開始、調査区北東部は 1 面の残存状況は悪く、ほとんどが 2 面以下の調査になった。第 2 区の調査は 4 月 10 日に終了し、調査区反転作業を 4 月 11 日、12 日に行い、残る南側 (第 3 区) の調査に着手。第 3 区に関しては 1 区・2 区の 1 面に対応する面が残存しておらず、2 面以下の調査となった。3 区の調査は 5 月 17 日に終了し、翌日以降、埋戻し、撤収作業等を行い 5 月 24 日に調査にかかる全ての業務を終了した。

Fig3　第 78 次調査地点位置図（1/1,000）

２．遺構と遺物

（１）１面上整地層（道路状遺構）の調査（Fig4）

調査区北西側の一部で検出した。表土鋤取りの際に表土直下に硬化面があることを確認し、部分的に調査を実施した。Fig6 の土層 1・2・3 から整地層であることが分かり、掘り下げの結果、硬化面の検出範囲と平行し、かつ一部重複するかたちで溝が検出されたため道路と判断した。遺跡内で初めての道路状遺構である。時期比定に耐えうる量の遺物は出土せず、詳細は不明であるが、後述する近世の井戸 SE01 との関係から近世以降の道路と考えられる。

（２）１面・２面の調査

調査区北西側で検出した道路直下と、北東側の一部は周囲より浅く遺構面が検出されたため、これを便宜的に 1 面とし、2 面はその下に設定した。1 面は堆積層 (包含層) と遺構の覆土が極めて酷似しており、 実際は 1 面で検出できなかったものを 2 面で検出・調査した遺構も多いと考えられる。両面で検出した遺構に顕著な時期差は認められず、各遺構間では若干の時期さは認められるものの、それを層位別に明確に分けることはできない。したがって、ここでは各面で調査した遺構を番号順にまとめて報告する。

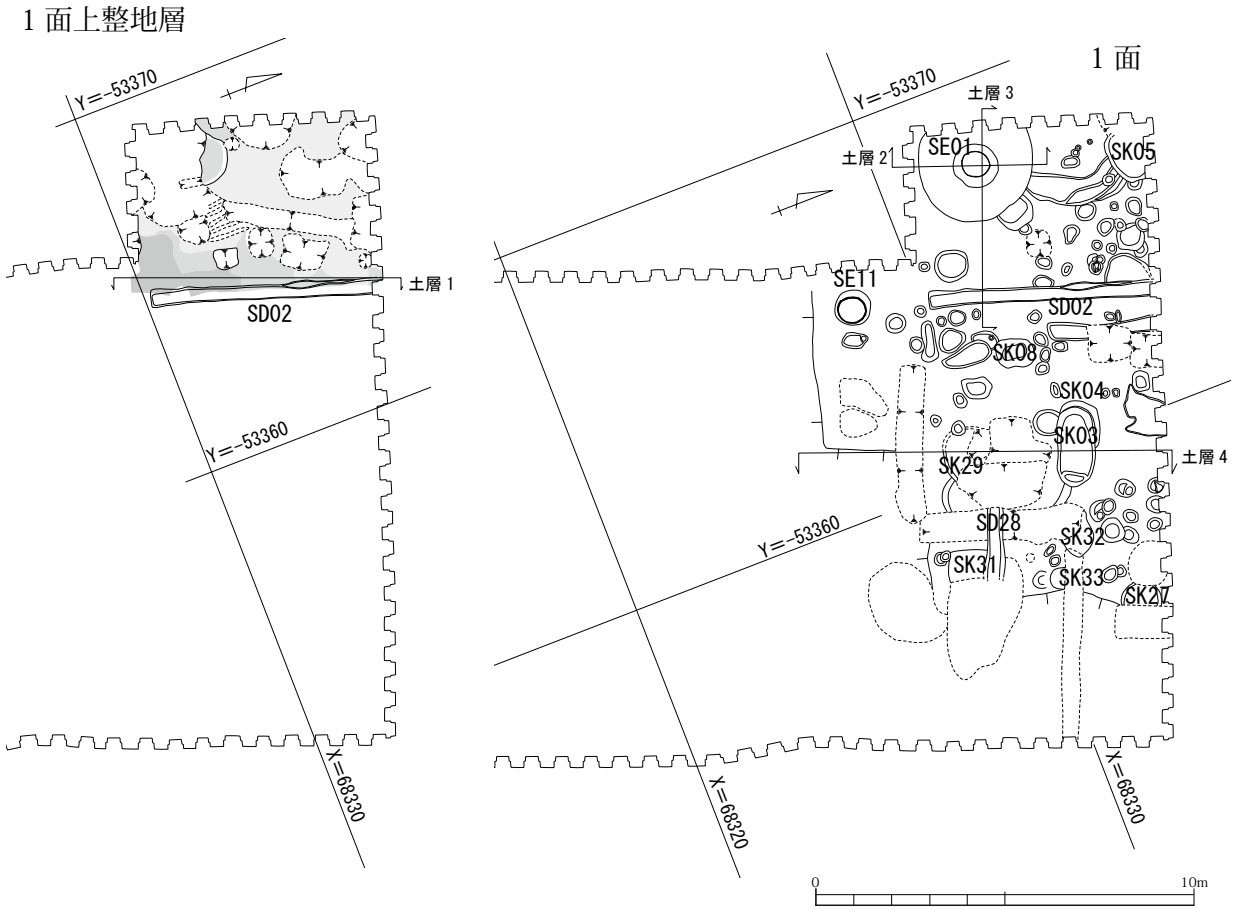
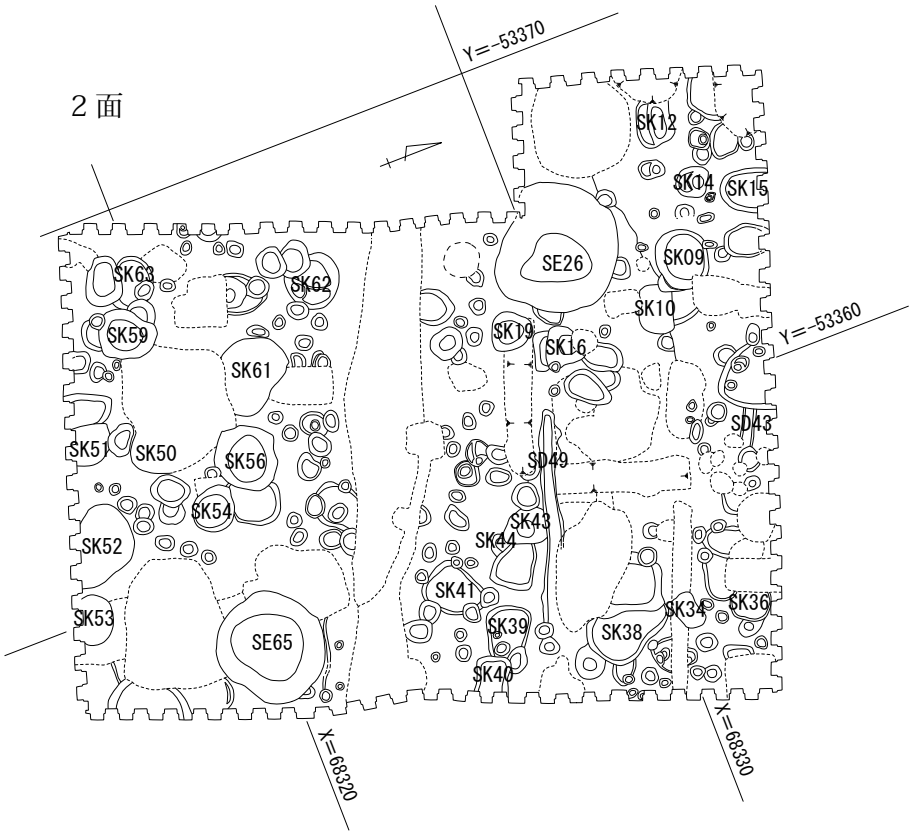


Fig4　1 面上整地層平面図および 1 面遺構配置図（1/200）



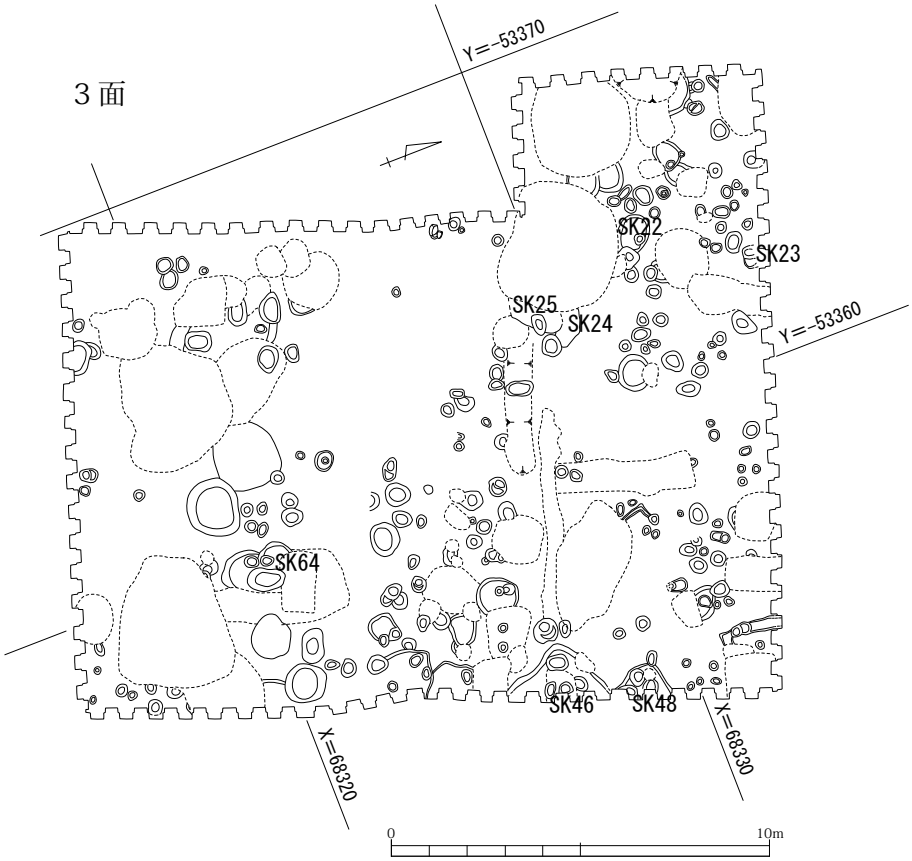
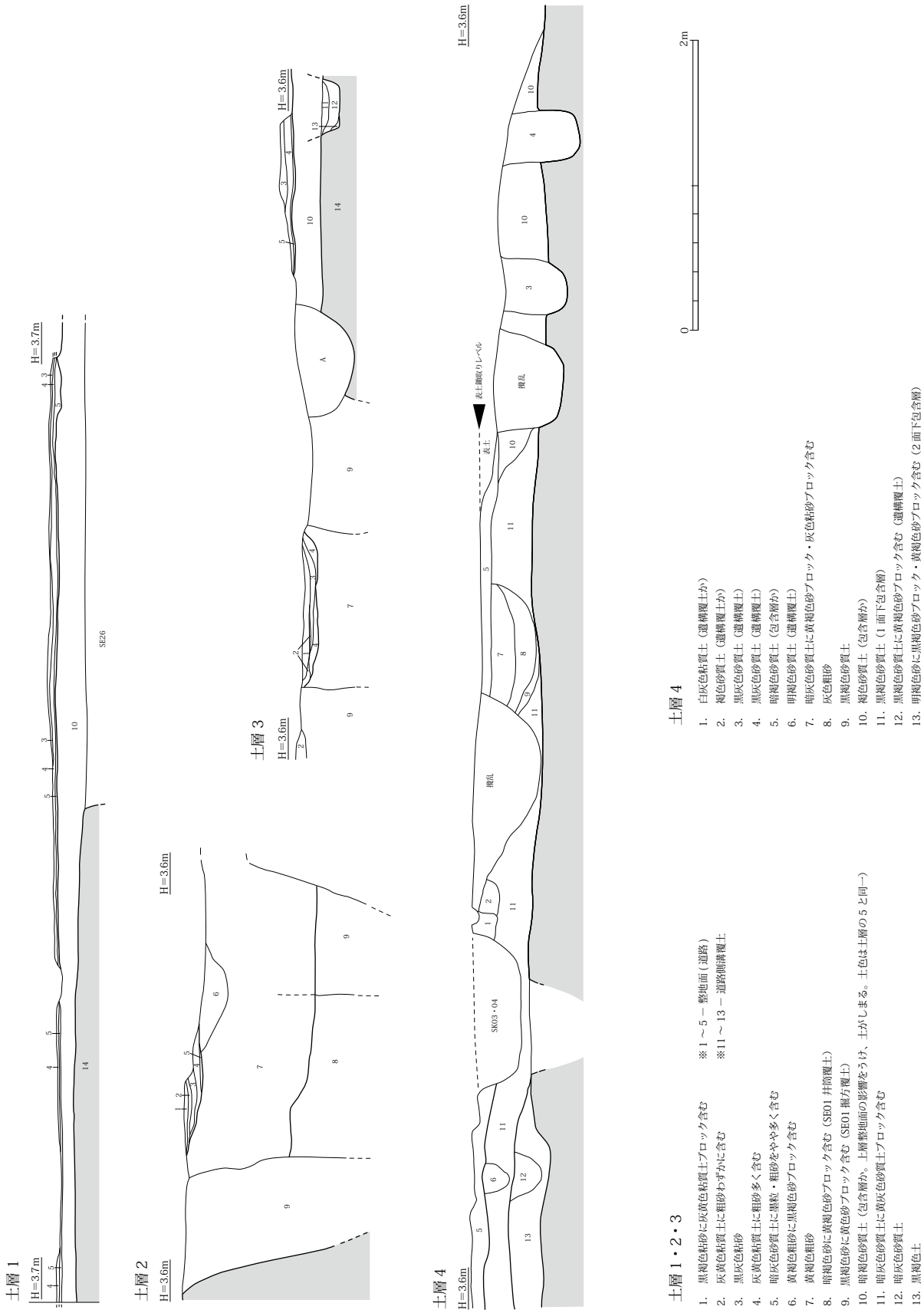


Fig5　2 面遺構配置図および 3 面遺構配置図（1/200）



土層1・2・3

1. 黒褐色粘砂に灰黄色粘質土ブロック含む　※1～5－整地面（道路）
2. 灰黄色粘質土に粗砂わずかに含む　※11～13－道路側溝覆土
3. 黒灰色粘砂
4. 灰黄色粘質土に粗砂多く含む
5. 暗灰色砂質土に黒粘・粗砂をやや多く含む
6. 黄褐色粗砂に黒褐色砂ブロック含む
7. 黄褐色粗砂
8. 暗褐色砂に黄褐色砂ブロック含む（SE01井筒覆土）
9. 黒褐色砂に黄色砂ブロック含む（SE01掘方覆土）
10. 暗褐色砂質土（包含層か。上層整地面の影響をうけ、土がしまる。土色は土層の5と同一）
11. 暗灰色砂質土に黄灰色砂質土ブロック含む
12. 暗灰色砂質土
13. 黒褐色土
14. 暗褐色砂質土（10と酷似するが土にしまりなし）

土層4

1. 白灰色粘質土（遺構覆土か）
2. 褐色砂質土（遺構覆土か）
3. 黒灰色砂質土（遺構覆土）
4. 黒灰色砂質土（遺構覆土）
5. 暗褐色砂質土（包含層か）
6. 明褐色砂質土（遺構覆土）
7. 暗灰色砂質土に黄褐色砂ブロック・灰色粘砂ブロック含む
8. 灰色粗砂
9. 黒褐色砂質土
10. 褐色砂質土（包含層か）
11. 黒褐色砂質土（1面下包含層）
12. 黒褐色砂質土に黄褐色砂ブロック含む（遺構覆土）
13. 明褐色砂に黒褐色砂ブロック・黄褐色砂ブロック含む（2面下包含層）

Fig6　調査区基本層序層序（1/40）

井戸

井戸は 4 基検出した。近世以降の井戸が 2 基、中世の井戸が 2 基。井筒が明確なものは近世以降の瓦組井戸のみで、残りは抜き取りや腐食によって確認できなかった。

SE01（Fig7）

1 面の調査区北西で検出した。整地層の下に位置しているが、井筒部分が落ち込んだためか、整地層の一部が半円形に一段低く検出されたことから直下に井戸があることが分かった。掘方はやや不整形な円形を呈し、断面形は碗型をなす。井筒の痕跡は上記のとおり検出時から明確に認識できたが、井筒そのものは断面を精査しても確認できなかった。腐食の可能性が最も強いが、Fig6- 土層 2 に示す通り、井戸上層の一部が南北方向に攪乱されており、道路造営に伴う整地の前段階で井筒を抜いている可能性もある。以下の遺物から、17 世紀～ 18 世紀前半前後の遺構と考えられる。

1 は陶器擂鉢である。色調は茶褐色を呈する。2 は現川焼の皿である。釉調は茶褐色を呈し、内面にはいわゆる巻刷毛目を施す。3 は土製品である。猿を模したものか。

SE11（Fig4）

1 面の調査区西側で検出した近世以降の瓦組の井戸である。井筒の径が 75cm であるのに対し、掘方の径が 90cm であり、安全に掘削することが困難と判断し、掘削は断念した。

SE26（Fig8）

2 面の北西で検出した。SE01 に東接する。掘方はやや不整形な円形を呈し､径は約 330cm を測る。検出から約 200cm 程度掘削したところで、段をなすことから、この部分を井筒と判断し、さらに掘削して井筒痕跡を確認しようと試みたが、標高 0.6m 付近で湧水したため、以下の掘削は中止した。出土遺物には､未図化資料を含めても 12 世紀～ 13 世紀のものが偏りなく出土している。したがって、ここでは若干時期幅をもたせ 12 世紀～ 13 世紀中頃の遺構とする。

4 ～ 6 は白磁埦である。4 は玉縁口縁をもつⅣ類か。5・6 はいずれも口縁端部が屈曲する碗 V-4 類である。7 は白磁皿で、口縁端部が屈曲する皿Ⅳ -2 類である。8 ～ 13 は土師器皿である。全て底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は 1.2cm・9cm・7.6cm。14 ～ 16 は土師器坏である。いずれも底部糸切りで器高・口径・底径の平均は 2.7cm・13.5cm・9.7cm。17・18 は土師器丸底坏である。器高・口径の平均は 3.6cm・16.5cm。19 は平瓦である。薄く、外面に縄目タタキが残る。

SE65（Fig9）

2 面の南東部で検出した。掘方はやや不整形な円形を呈し、立ち上がりは直である。検出面から約 140cm 下に平坦面を設ける。井筒は中心からやや北西寄りの部分に据えられている。井筒そのものは残存していなかったが、腐食した痕跡が平面、断面ともに確認された。結桶か。標高 0.8m 前後で湧水したため以下の掘削は中止した。以下の出土遺物から 12 世紀代の遺構と考えられる。

20・21 は白磁埦である。20 は玉縁口縁の口縁片。碗Ⅳ類か。21 は体部を丁寧に打ち欠く。22 ～ 24 は土師器皿である。いずれも底部糸切りで、22 は体部上半を丁寧に打ち欠く。器高・口径が分かる 23・24 の平均は、器高 1.3cm、口径 9.7cm。底径が分かる 22・23 の平均は 6.8cm。25 は楠葉型瓦器碗の口縁片である。口縁端部の沈線はないが、ミガキは丁寧に施される。26 は土師質の鍋。外面ハケ目仕上げ、内面はヘラ状工具による強めのナデを施すが、雑で、粘土紐の継ぎ目が顕著に残る。

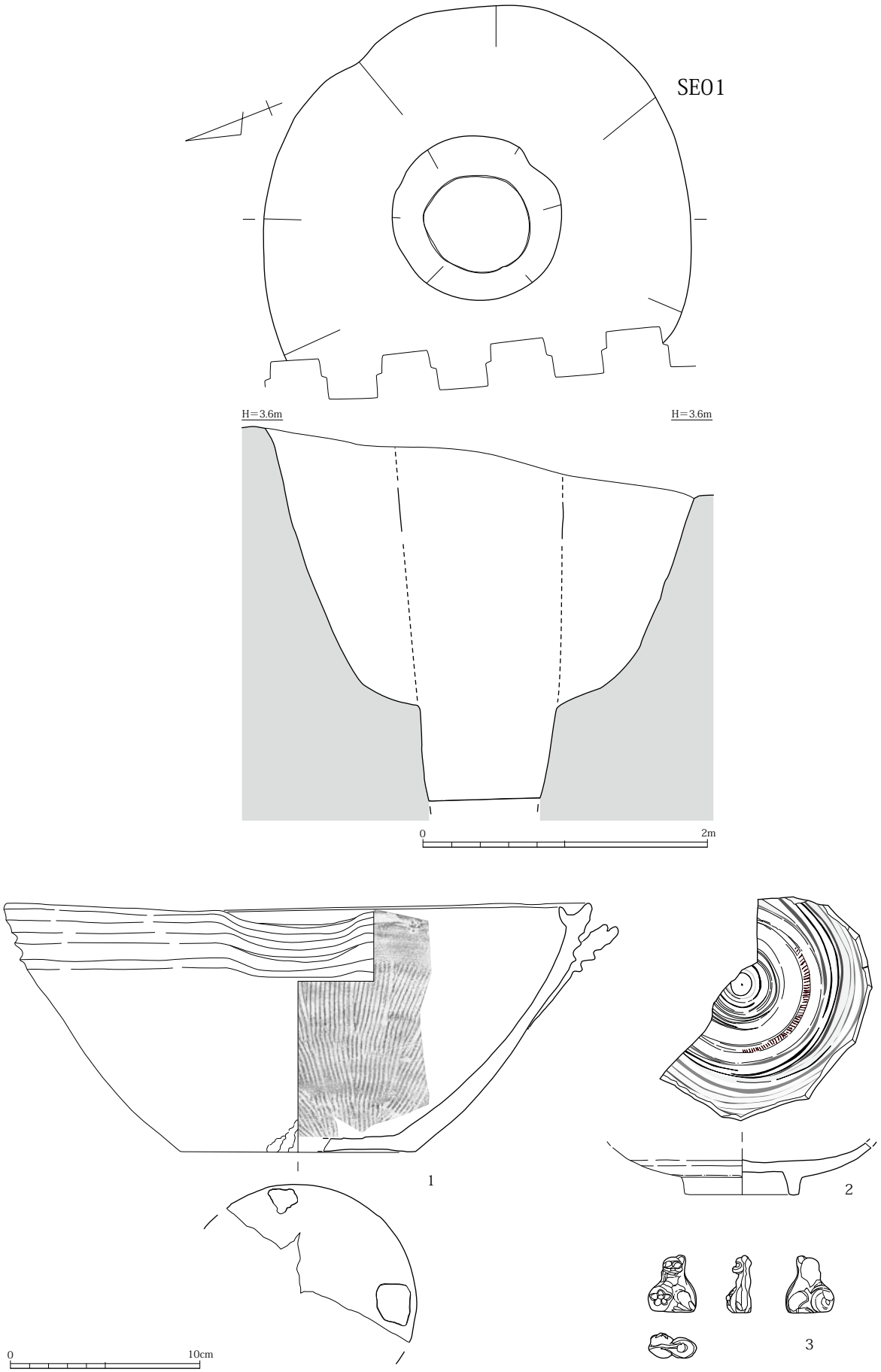


Fig7　SE01 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

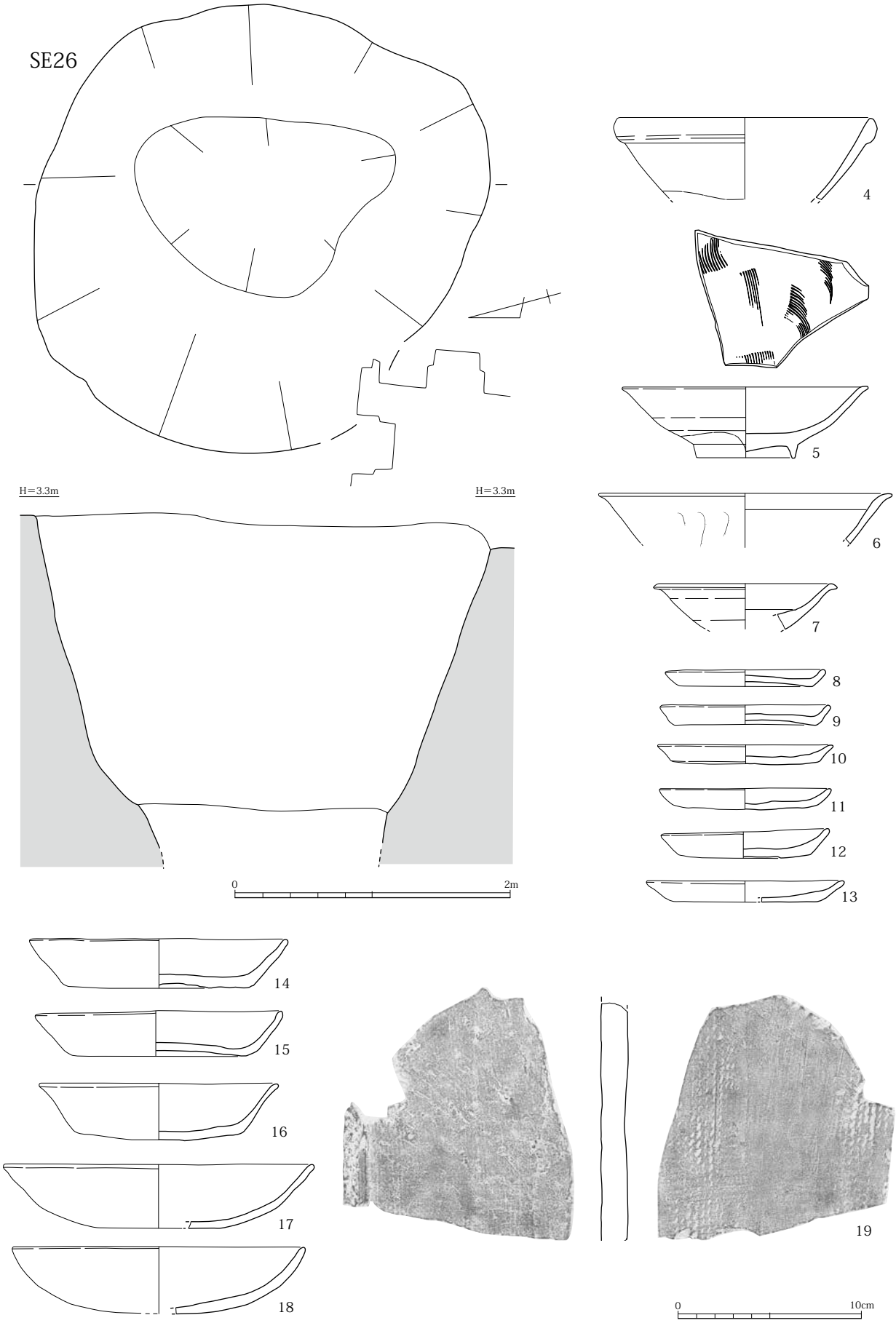


Fig8　SE26 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

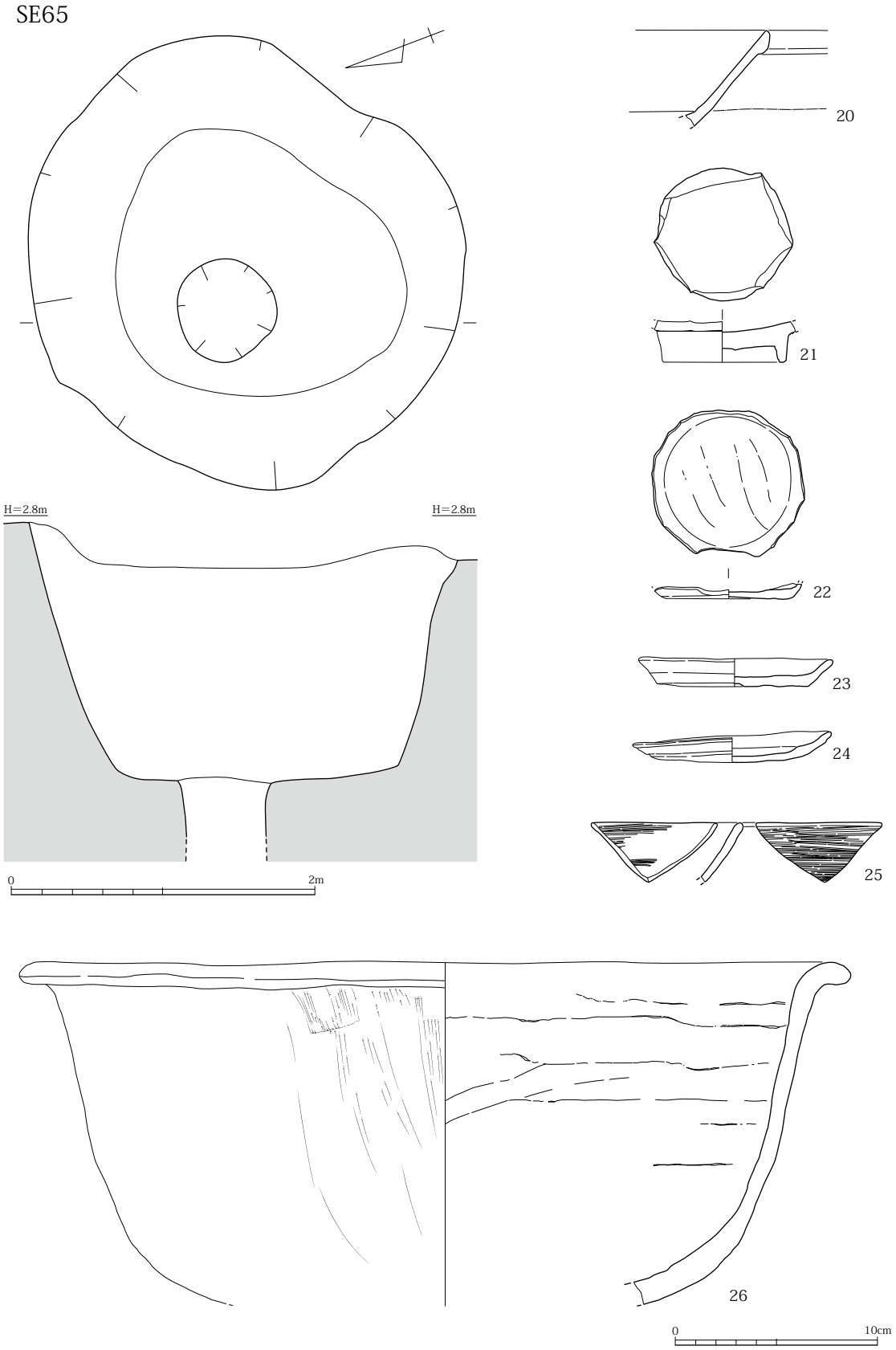


Fig9　SE65 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

溝

1 面・2 面で 3 条検出した。いずれも現在の街区に平行、もしくは直交する。

SD28（Fig10）

1 面の中央やや北寄りで検出した。両端を攪乱に切られる。断面は逆台形を呈し、残存状態は不良であるが、深い部分では 25cm 程度残存する。出土遺物はいずれも小片で、図化し得るものはなく、時期は不明。

SD43（Fig10）

2 面の北側で検出した。残りは悪く、断面は逆台形を呈するものと考えられるが、深さは最深部でも 10cm 程度しか残存していない。出土遺物はいずれも小片で、図化し得るものはない。

SD49（Fig10）

調査区中央やや北寄りで検出した。2 面で一部を検出し、当初は土坑として扱い、SK42 の遺構番号を付していたが、3 面で再検出した際、溝ということが明らかになった。断面は逆台形を呈し、深さは約 45cm を測る。出土遺物は少なく、時期は不明。

図化した 27 は 2 面で土坑として掘削した際に出土した楠葉型瓦器碗の口縁片である。口縁端部に沈線を有し、体部外面・内面に密なミガキを施す。

土坑

1 面・2 面ともに多くの土坑を検出した。注目すべきは土師器集積土坑が集中することで、分布傾向からみれば調査区の南側に顕著である。

SK03・04（Fig11）

1 面の北側で検出した。壁面沿いに粘土を張った、いわゆる粘土貼付け土坑である。遺跡内では 14 次調査地点などで検出されている。平面および土層観察から 2 基の粘土貼付け遺構が同一地点で切り合っていることが分かった。SK03 が SK04 を切る。本遺構の用途は不明であるが、粘土除去後の底面に鉄分の沈着が認められ、滞水環境にあったことがうかがえる。出土遺物は少なく、いずれも小片で図化に耐えうるものはない。

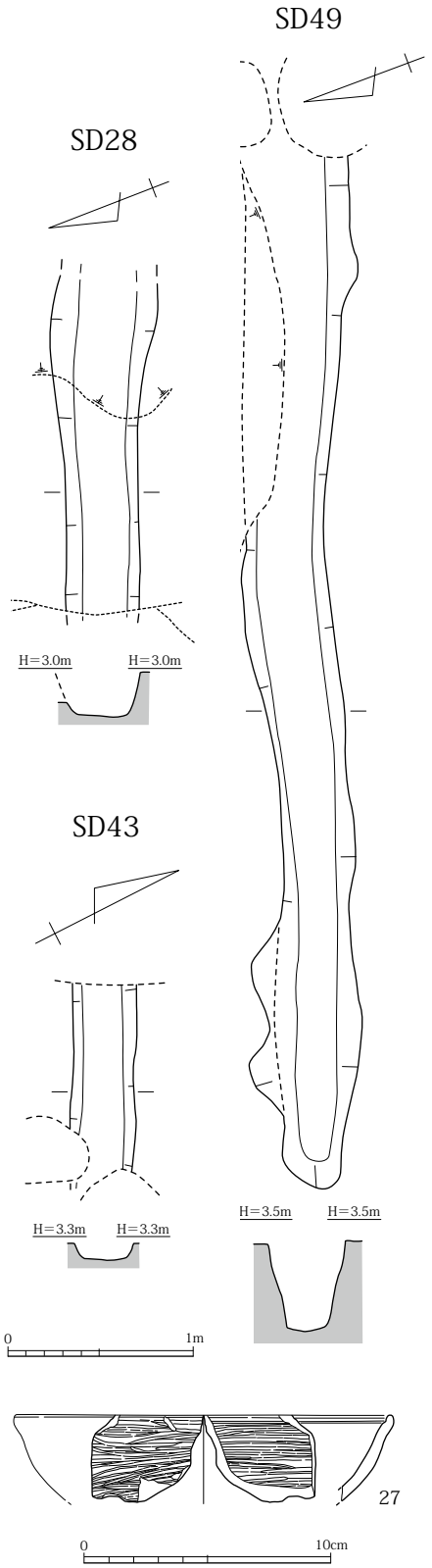


Fig10　SD28・43・49 実測図（1/40）
および SD49 出土遺物実測図（1/3）

SK05（Fig11）

1 面の北西端で検出した。北側は攪乱に切られる。断面はほぼ直に立ち上がり、深さは約 50cm 残存する。出土遺物で図化し得たのは 28 の瓦器碗 1 点のみで、詳細な時期は不明である。

SK08（Fig11）

1 面の中央やや北寄りで検出した。約 70cm × 100cm の不整方形を呈し、断面は逆台形を呈する。出土遺物が少ないため、時期の特定は困難であるが、以下の遺物から 12 世紀中頃～後半前後か。

29 は土師器坏である。底部は糸切りで、底径は 10.2cm。30・31 は土師器丸底坏である。いずれも底部ヘラ切りで、器高・口径の平均は 3.2cm・15.8cm。

SK09（Fig12）

2 面の北側で検出した。平面は約 130cm × 150cm の不整円形を呈し、断面は碗状にゆるやかに立ち上がる。深さは 20 ～ 40cm 残存する。以下挙げるようにまとまった量の土師器が出土している。出土遺物および SK10 との関係から 12 世紀中頃前後の遺構と考えられる。

32 は白磁皿Ⅱ類である。33 ～ 37 は土師器皿である。いずれも底部糸切りで、平均は器高 1.1cm、口径 9.3cm、底径 7.2cm である。38 ～ 46 は土師器坏である。46 は SK10 出土小片と接合する。いずれも底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は 2.9cm、・15.6cm・10.8cm である。

SK10（Fig12）

2 面北側で検出した土師器集積遺構である。土師器は図化した西側だけでなく、図にアミで示した東側にも集中していた。土師器の出土状況から東側から投棄されたことが分かる。平面は略方形を呈

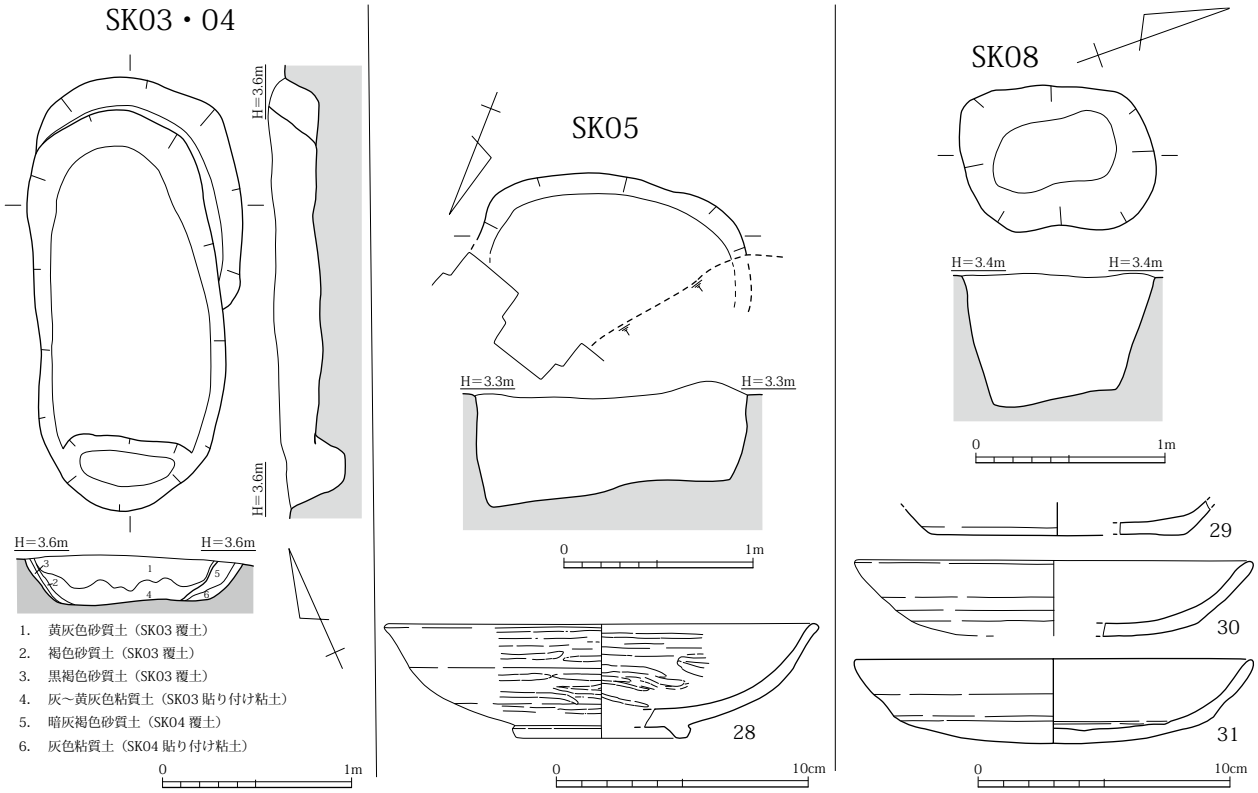


Fig11　SK03・04・05・08 実測図（1/40）および SK05・08 出土遺物実測図（1/3）

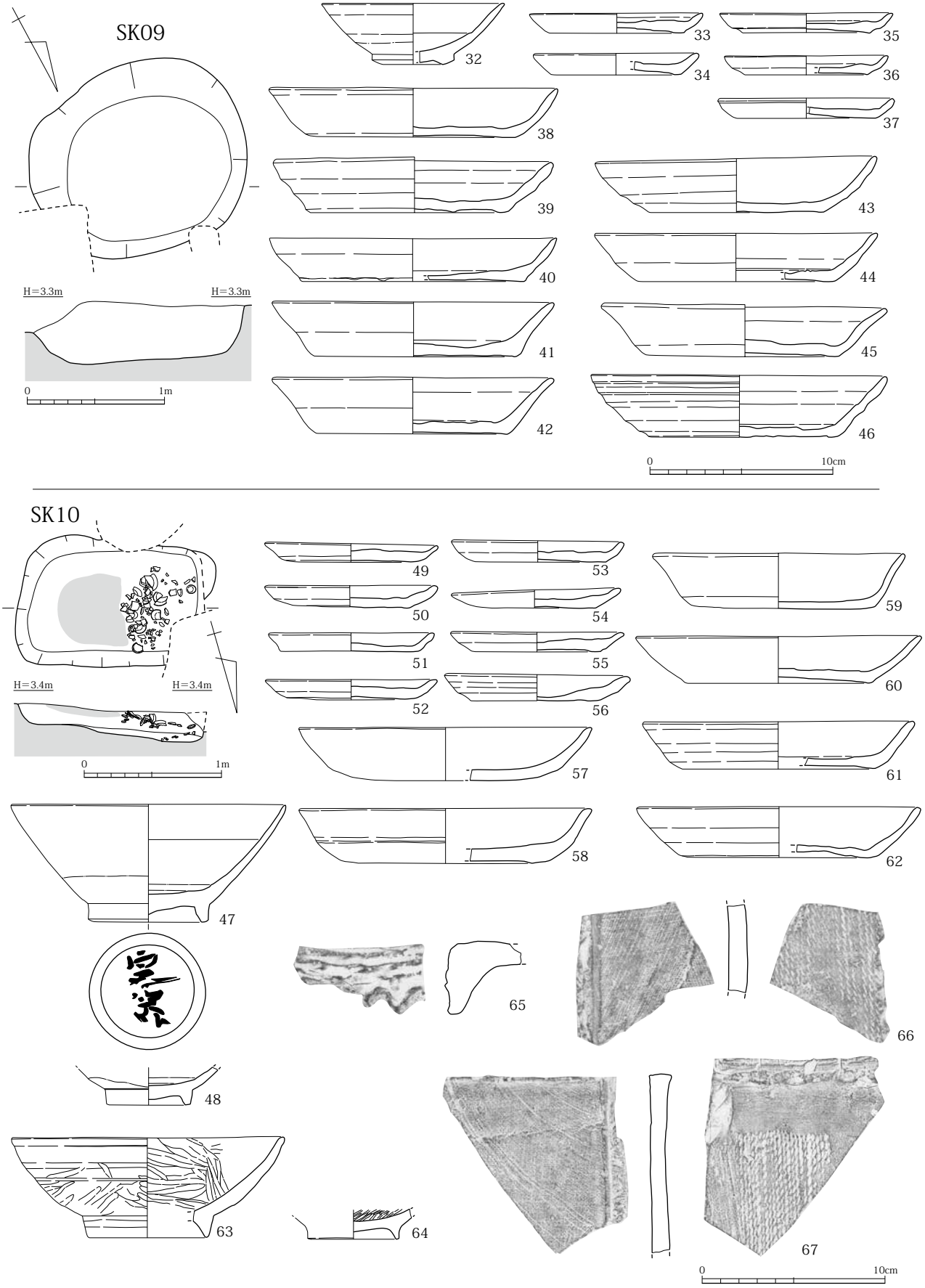


Fig12　SK09・10 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

し、深さは 20cm 程度残存する。以下の出土遺物から 12 世紀中頃前後の遺構と考えられる。

47 は白磁埦Ⅷ類で、見込みの釉を輪状に掻き取る。外底部には墨書を有する。二文字の漢字と考えられるが、判読不能。48 も見込みの釉を輪状に掻き取る白磁皿Ⅲ類である。49 ～ 56 は土師器皿である。49 ～ 51 は底部ヘラ切りで 52 ～ 56 は底部糸切り。法量は近似値を示し、器高・口径・底径の平均値は 1.1cm・9.3cm・6.7cm である。57 ～ 62 は土師器坏である。観察で判断できた 58 ～ 62 は全て底部糸切りである。器高・口径・底径の平均値はそれぞれ 2.8cm・15.3cm・10cm。63・64 は瓦器碗である。63 は筑前型瓦器碗。64 は楠葉型瓦器碗の底部片である。ミガキは非常に丁寧で、隙間はない。65 は波状押圧文軒平瓦の破片である。66・67 は平瓦片。器壁は薄く、外面は縄目タタキが残り、内面は布目の一部をナデ消す。

SK12（Fig13）

2 面の北西で検出した。約 90cm × 120cm ＋ α のややいびつな長方形を呈する。南側にテラスを設け、深さは約 25cm を測る。出土遺物は少ないが、11 世紀後半～ 12 世紀前半前後か。

68 は土師器皿である。底部ヘラ切りで、器高 1.3cm、口径 9㎝を測る。69 は土師器丸底坏である。器高 3.1cm、口径 14.6cm で、内面にはコテ当て痕が残る。70 は土垂である。長さ 4.9cm で丁寧なナデによって成形される。

SK14（Fig13）

2 面の北西で検出した。ややいびつな略方形を呈し、南側にはテラス状の段を設ける。深さは最深部で約 45cm 残存する。以下の出土遺物から 11 世紀前後の遺構と考えられる。

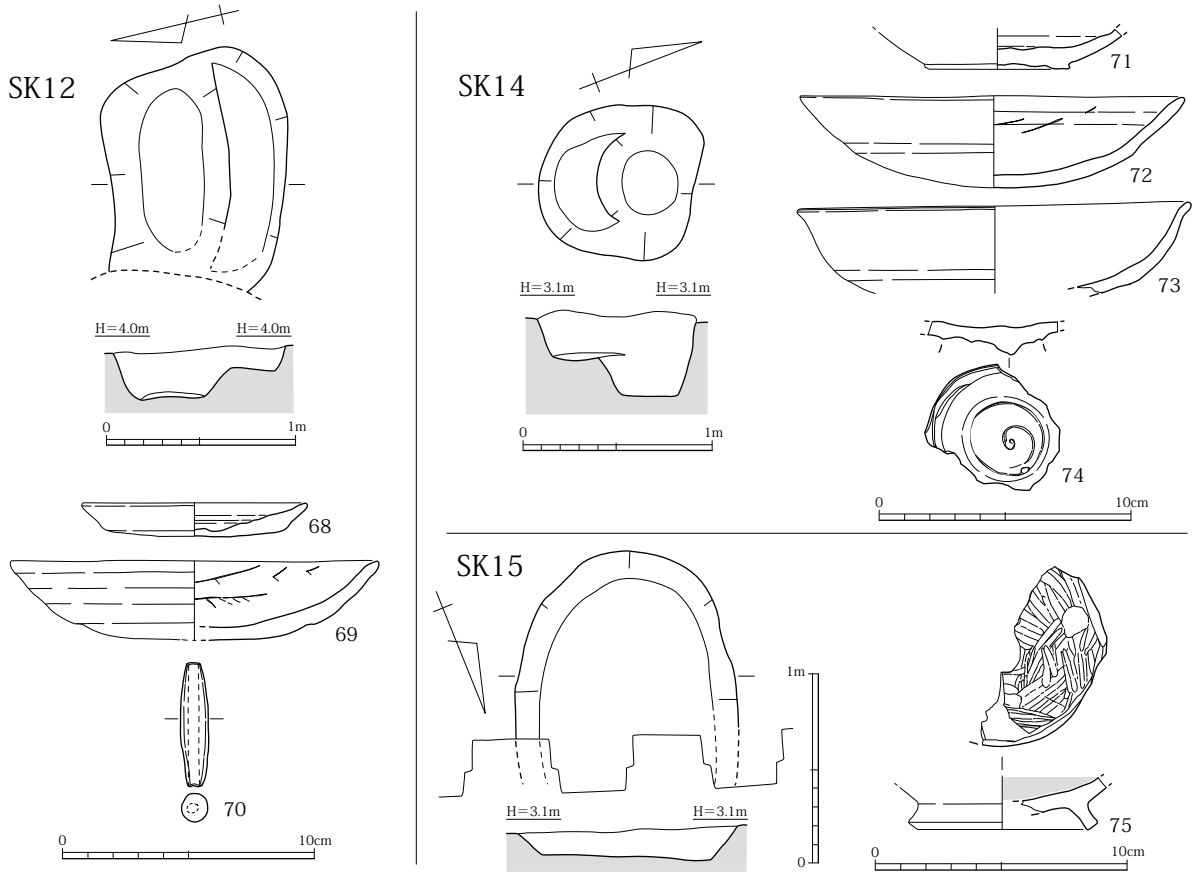


Fig13　SK12・14・15 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

71 は須恵器である。十瓶山窯須恵器の円盤状高台碗か。底径は 5.8cm。72・73 は丸底坏である。72 の内面にはコテ当て痕が残る。74 は土師質の不明土器である。図下の凸部は接合部が剥離したものか。

SK15（Fig13）

2 面の北端で検出した平面楕円形を呈する土坑である。北半は調査区外に延びる。出土遺物のうち、図化し得たのは以下の 1 点のみで、直接の遺構の時期を示すものではない。

75 は黒色土器 A 類の碗である。内面にはミガキの痕跡が残る。

SK16（Fig14）

2 面の中央やや北寄りで検出した。北側の約 1/3 は攪乱されている。平面は不整形をなし、断面は擂鉢状に直に立ち上がる。深さは約 40cm 残存する。以下の出土遺物から 13 世紀前半～中頃前後の遺構と考えられる。

76 ～ 78 は土師器皿である。いずれも底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は 1.2cm・9.2cm・6.7cm を測るが、78 は器形および法量に若干の差が認められる。79 ～ 81 は土師器坏である。いずれも底部糸切りである。器高・口径・底径の平均は 2.7cm・13.2cm・9㎝。

SK19（Fig14）

2 面中央西寄りで検出した。不正円形の土坑である。断面は直に立ち上がり、深さは約 45cm を測る。以下の出土遺物から 12 世紀後半前後に比定される。

82 は土師器皿。底部糸切りで、器高 0.9cm、口径 10cm、底径 8cm である。83 は土師器坏である。底部糸切りで、器高 2.6cm、口径 16㎝、底径 9.2cm。84 は瓦器碗である。内外面のミガキははっきりと確認できる。

SK27（Fig14）

1 面北東部で検出した。 東西の両端を攪乱に切られるが、残存部から円形を呈するものと想定される。出土遺物で図化し得たのは以下の 1 点のみで詳細な時期は不明。

85 は白磁碗である。底部は低く厚い。碗Ⅳ類か。

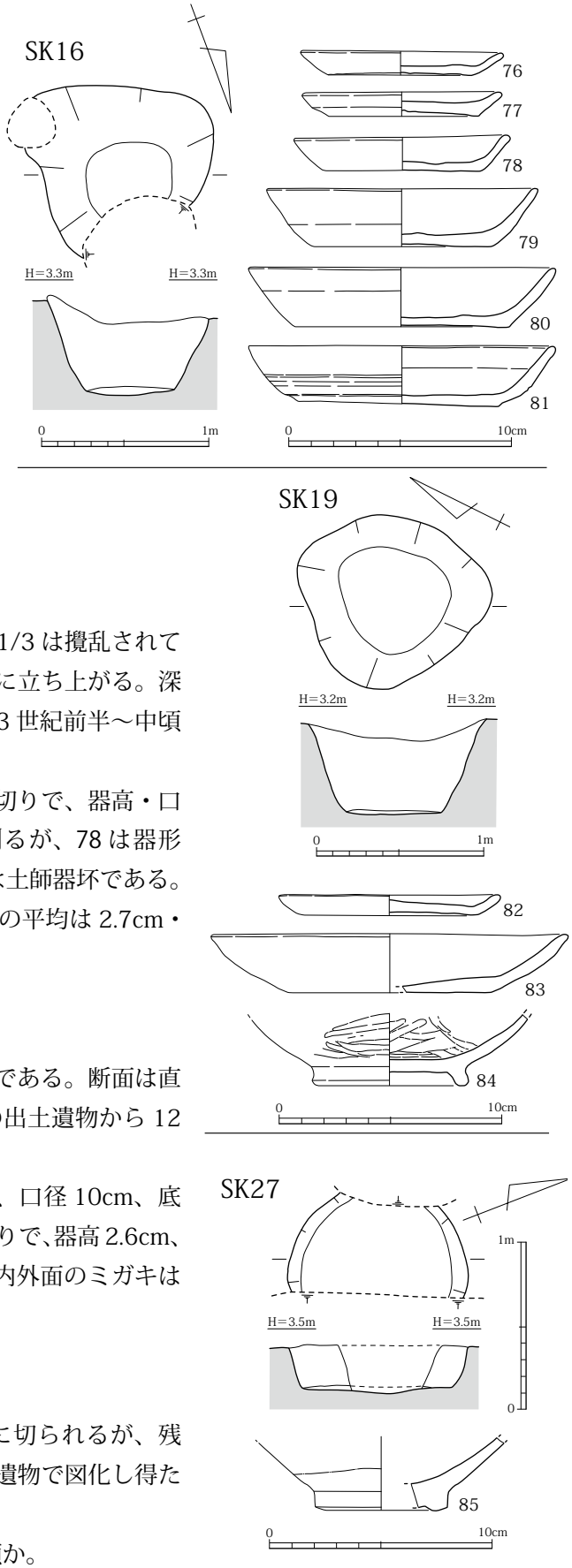


Fig14　SK16・19・27 実測図（1/40）
および出土遺物実測図（1/3）

SK29（Fig15）

1 面の中央部で検出した。北東側は複数の攪乱によって切られるが、不正円形を呈するものと想定される。立ち上がりは直で、断面は箱型を呈する。以下の出土遺物から 12 世紀中頃前後に比定できる。

86・87 は土師器皿である。いずれも底部ヘラ切りである。器高はそれぞれ 1.2cm で、口径は 9.8cm、9.2cm。88 は土師器坏である。底部糸切りで、器高 3.1cm、口径 16㎝、底径 10.4cm。

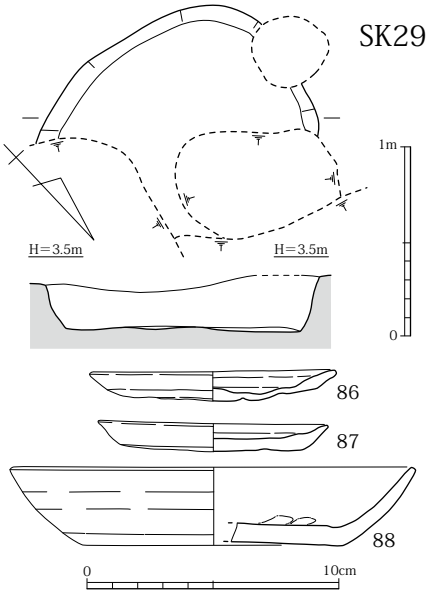


Fig15　SK29 実測図（1/40）
および出土遺物実測図（1/3）

SK31（Fig16）

1 面の中央部で検出した。東側および北側を攪乱に切られるが、残存部から比較的整った長方形を呈する遺構と考えられる。南側に段をもち、断面は直線的である。深さは約 35cm を測る。土師器他の遺物がまとまって出土した。以下の出土遺物から 12 世紀中頃前後の遺構であると考えられる。

89 は白磁皿である。90 ～ 94 は土師器皿である。いずれも底部ヘラ切りだが、90 ～ 92 は丸底を呈し、93・94 は平底化傾向が強い。このうち 92 の法量は皿と坏の中間的な数値を示すが、他の丸底坏とは大きく異なることからここでは皿として報告する。器高 2.5cm、口径 10.6cm。92 を除いた法量の平均は器高 1.5cm、口径 9.4cm。95 ～ 99 は丸底坏である。いずれも底部ヘラ切りで、法量の平均は器高 3.2cm、口径 15cm である。100・101 は土師器坏である。両者ともに底部糸切りである。器高・口径・底径の平均は、2.9cm・14.5cm・10cm。102 は瓦器碗である。103 は高台付の碗である。内外面にミガキを施す。その他 Fig33 に示した石鍋も出土している。

SK32（Fig16）

1 面の北側で検出した。南西部を攪乱に切られる。断面形はやや丸みをもちながら立ち上がり、東側には段をもつ。深さは最深部で約 60cm 残存する。上層の中心から土師器が集中して出土することから、土坑埋没の最終段階で一定単位の土師器を投棄したものと考えられる。以下の土師器の法量にはバラつきがあるため、時期幅をもたせて 13 世紀代の遺構としておく。

104 ～ 108 は土師器皿である。いずれも底部糸切りである。器高・口径・底径の平均は、1.3cm・9.1cm・6.9cm。109・110 は土師器坏である。両者とも底部糸切りである。器高・口径・底径の平均は、2.7cm・13.5cm・9.2cm。111 は畿内産瓦器の皿である。体部上半と下半で接合しなかったため、図上復元している。器壁は極めて薄く、内外面には細筋のミガキが確認されるが、略化傾向が強く隙間が目立つ。見込みには暗文による文様を施す。楠葉型瓦器か。

SK33（Fig16）

1 面の北側、SK32 の東で検出した。北半は攪乱によって切られるが、円形を呈すると考えられる。破片を中心とする土師器がまとまって出土した。SK32 とほぼ同時期の 13 世紀代の遺構と考えられる。

112 ～ 114 は土師器皿。いずれも底部糸切りである。器高・口径・底径の平均は、1.1cm・9㎝・7.2cm である。115 は土師器坏。底部糸切りで、器高 2.3cm、口径 13cm、底径 9㎝を測る。

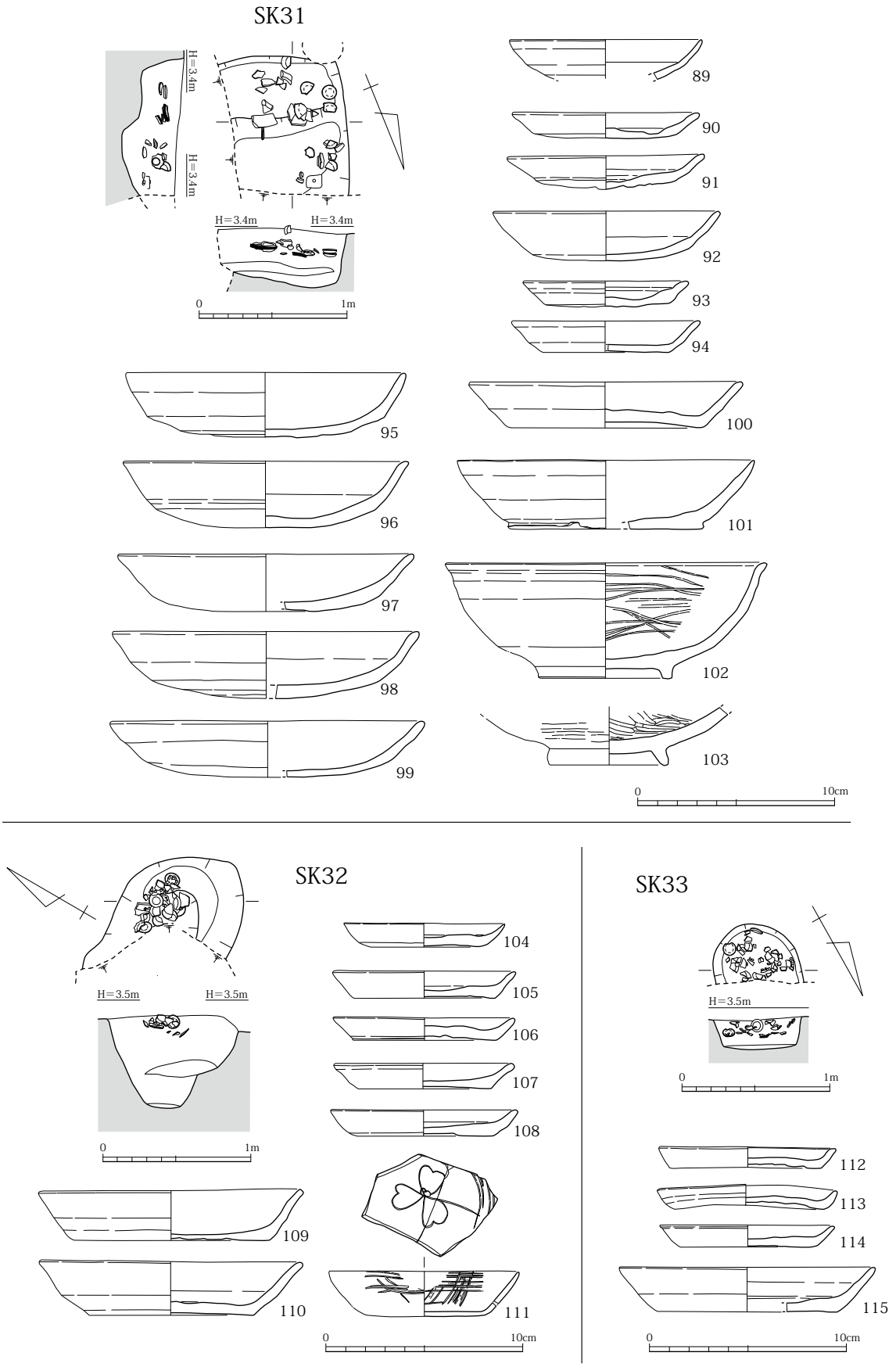


Fig16　SK31・32・33 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK34（Fig17）

２面の北東部で、溝状の攪乱にかかる形で検出した。平面は約60cm × 100cm の丸みをもつ長方形を呈する。断面は碗型に内湾しながら立ち上がり、東側にはテラス状の段をもつ。覆土中に大量の焼土を含み、中層～上層からは完形のものを含む土師器が複数点出土している。以下に挙げる出土遺物から 11 世紀前半前後の遺構と考えられる。

116 ～ 118 は土師器皿。全て底部ヘラ切りで、器高・口径の平均は 1.4cm・10.3cm である。119 は土師器碗である。内外面には比較的丁寧で密なミガキが施される。120 ～ 125 は土師器丸底坏である。120・121 は内面にコテ当て痕が認められ、特に 121 に顕著である。122 は内面が光沢があり、単位は確認できないが、ミガキを施しているものと考えられる。123 も部分的ではあるが、内面の上半にミガキを施すか。丸底坏の法量は比較的近似値を示し、器高・口径の平均は 3.3cm・14.9cm である。

SK36（Fig18）

１面の北東で検出した。西側が攪乱されるが、残存部から円形を呈するものと推定される。深さは浅く、検出面から約 12cm 程度で床面となる。出土遺物は図化したものの他に土師器小片を数点確認している。

126 は白磁埦の口縁片。玉縁口縁を有する碗Ⅳ類である。127 は黒色土器 B 類の碗である。高台の径は小さい。

SK38（Fig18）

２面の北東で検出した平面不整形の土坑である。西側を攪乱によって切られる。床面はほぼ平坦であるが、断面形は浅い碗型状をなし、立ち上がりはゆるやかである。以下の出土遺物から 13 世紀代と考えられる。その他、混入資料ではあるが、本遺跡においてはじめて遺構が形成される弥生時代のものがある。

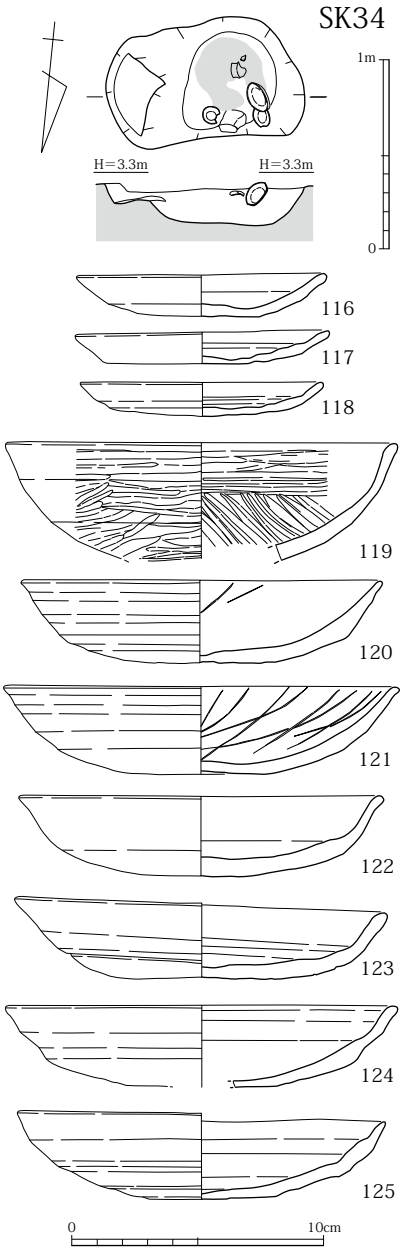


Fig17　SK34 実測図（1/40）
および出土遺物実測図（1/3）

128・129 は土師器皿である。両者ともに底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は 1.2cm・8.8cm・7.1cm である。130・131 は土師器坏である。いずれも底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は 2.8cm・13.3cm・8.8cm である。132 は黒色土器 B 類の碗である。体部上半の外反は鈍く、高台の径は小さい。133 は弥生時代後期初頭の甕である。口縁は「く」の字型を呈し、頸部には突帯を巡らせる。体部内・外面ともにハケ目仕上げで、胴部最大径は口縁径をやや上回る。

SK39（Fig18）

２面の東側で検出した。ピットおよび SK40 に切られる。平面は略方形を呈し、断面は床面は丸みをもつが、立ち上がりは直である。出土遺物には、図化したもの以外に底部ヘラ切りを主体とする土

師器小片が出土したことから、12 世紀前半前後の遺構と考えられる。

134 は白磁埦Ⅴ類。高台は細く高い。135 は白磁皿である。低く厚い高台をもつ皿Ⅱ類か。

SK40（Fig18）

2 面の東端で検出した平面方形の土坑である。SK39 を切る。深さは 80cm を測り壁面はほぼ直に立ち上がる。遺物には混入資料が多く , 時期は不明。

図化した 136 は楠葉型瓦器碗の口縁片である。

SK41（Fig19）

2 面の東側で検出した。平面は不整形を呈し、深さは約 15cm 程度残存する。以下の出土遺物および確認した未図化資料から 10 世紀～ 11 世紀前半の遺構と考えられる。

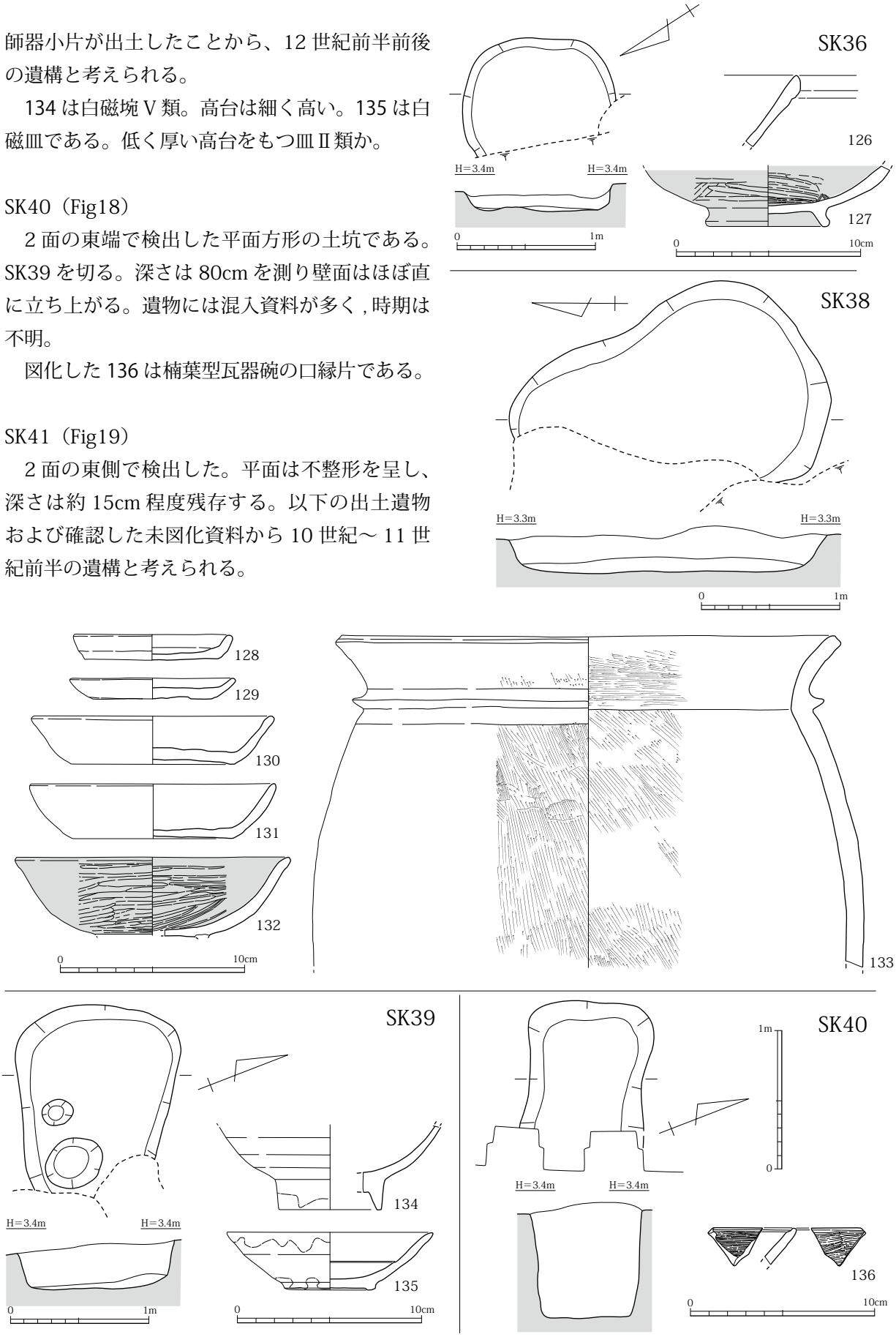


Fig18　SK36・38・39・40 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

137 は土師器皿である。底部ヘラ切りで、器高 1.3cm・口径 9.6cm。138 は土師器坏、もしくは碗である。内面には密なミガキの痕跡が認められる。139 は器高が高いためここでは碗とする。内面にはコテ当て痕がわずかに残る。140 は黒色土器 A 類の碗である。

SK43（Fig19）

2 面の中央部で検出した。平面は約 100cm × 130cm の卵型を呈し、断面は碗型を呈する。深さは約 40cm 残存。以下の出土遺物以外に底部糸切りを主体とする土師器を確認しており、12 世紀中頃～後半前後の遺構と考えられる。

141 は白磁埦の底部片である。142 ～ 147 は土師器皿である。底部の切り離しは、観察できなかった 147 を除き全て糸切りである。143 ～ 145 はいずれも見込み部が極めて薄く、意図的に押し出すことで丸底化を図っていることが分かる。器高・口径の平均は 1.3cm・9.4cm である。

SK44（Fig19）

2 面の中央部付近で検出した。SK43 に切られる平面不正円形の土坑である。深さは最深部で 40cm 程度を測る。以下に図化した遺物以外に、底部ヘラ切りと糸切りの土師器が混在することから、12 世紀中頃前後の遺構と考えられる。

148 は白磁埦である。口縁下および見込み部に沈線が認められる。

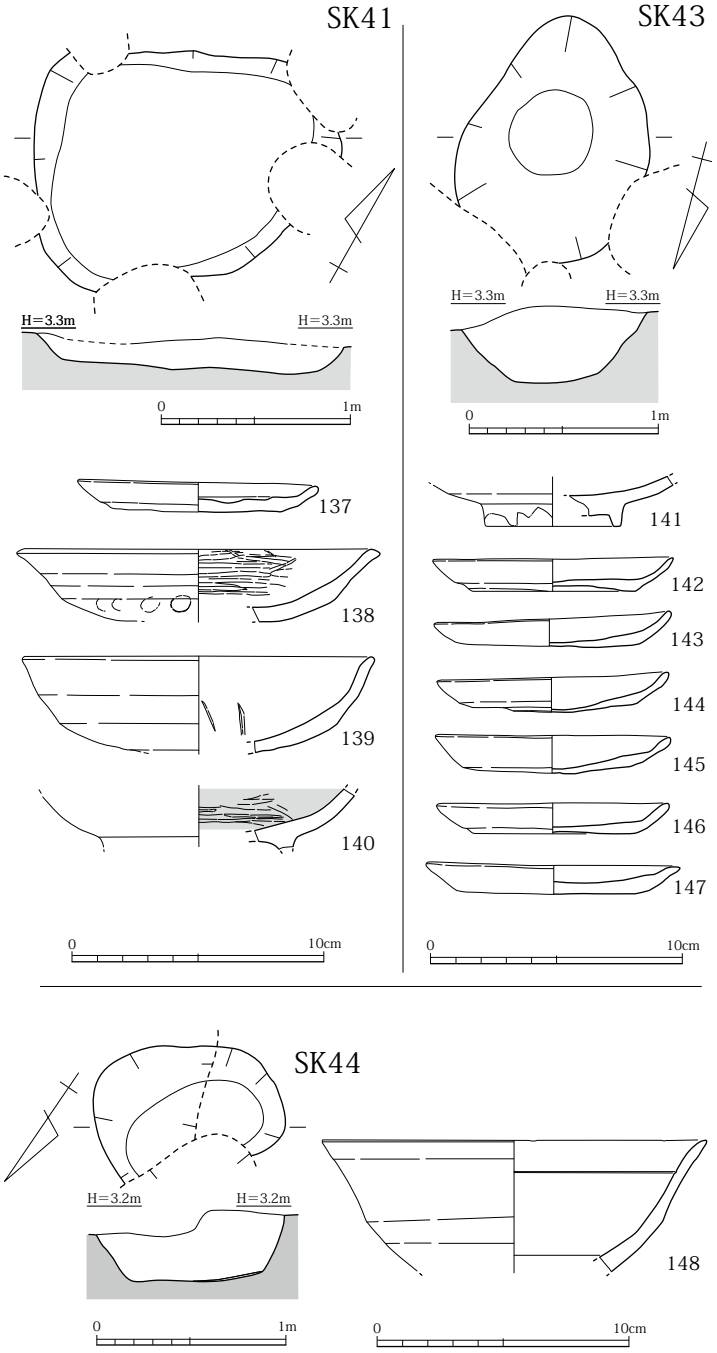


Fig19　SK41・43・44 実測図（1/40）
および出土遺物実測図（1/3）

SK50（Fig20）

2 面南側で検出した。遺構の大半が攪乱によって切られ詳細は不明であるが、残存部からは図示したとおり、多数の土師器が確認され、土師器の一括廃棄遺構であるということが分かる。平面は不整円形で、断面は碗型を呈する。深さは確認できた部分で 90cm 残存。まとまった遺物が出土するが、陶磁器が占める割合は極めて低い。以下に示す遺物から本遺構の時期は 12 世紀後半に位置付けられる。

149 は龍泉窯系青磁碗の体部片。内面には劃花文を施し、口縁部はわずかに外反する。150 は同安窯系青磁皿である。見込みにジグザグ状の点描文を施す。151 ～ 161 は土師器皿である。全て底部糸切りである。器形に若干の違いはあるが、法量は近似値を示し、器高・口径・底径の平均は 1.2cm・9.2cm・7.2cm である。162 ～ 174 は土師器坏である。全て底部糸切りで、法量は皿同様近い数値を示し、器高・口径・底径の平均は 2.9cm・15cm・10cm である。

SK51(Fig21)

調査区の南端で検出した平面不正円形の土坑である。南側は調査区外に延びる。断面は碗型を呈し、深さは最深部で約 50cm 残存。中層以下から土師器がまとまって出土した。土師器は完形のものの他に体部を打ち欠くものを複数確認している。以下に図示した出土遺物から 13 世紀代の遺構と考えられる。

175 は白磁皿である。混入資料か。176 ～ 181 は土師器皿である。いずれも底部糸切りである。179 ～ 181 は体部上半を打ち欠く。法量が分かる 176 ～ 178 の器高・口径・底径の平均は、1.2cm・8.4cm・6.5cm である。182 ～ 188 は土師器坏である。全て底部糸切りである。186 ～ 188 は皿同様体部を打ち欠く。182 ～ 185 の器高・口径・底径の平均は 2.6cm・13.2cm・9.3cm であるが、器形で大別すると、立ち上がりが直で器高が高い 182・183 と、やや内湾しながら立ち上がる 184・185 に分かれる。器高・口径・底径の平均は、前者が 2.9cm・12.9cm・8.9cm。後者が、2.4cm・13.7cm・9.7cm。189 は須恵器甕の胴部片である。

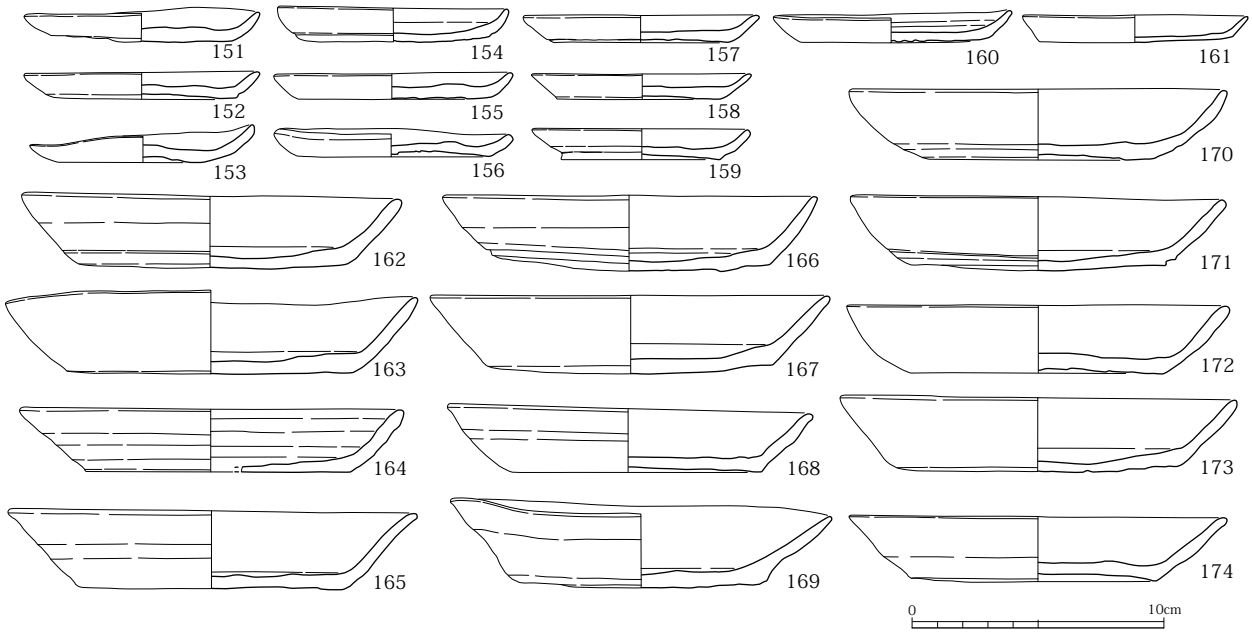


Fig20　SK50 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK52(Fig22)

調査区の南端で検出した。当初は 1 基の土坑として検出・掘削していたが、床面直上で別遺構ということが明らかになった。南側の遺構が北側の遺構を切る。検出した時点で土師器がまとまって出土したことから、以下にも同様に土師器が集中するものと想定していたが、覆土中からわずかに出土するのみでまとまった量の土師器は認められなかった。したがって、土坑と土師器の直接的な因果関係は不明。土坑の埋没の最終段階で投棄した可能性が強いが、完全な埋没後に生活面上に捨てられた可能性は否定できない。以下図示する遺物のうち上層の土師器、覆土中の遺物ともに底部は糸切りであり、遺構は 12 世紀後半前後に比定される。

190 ～ 194 は土師器坏である。いずれも底部糸切りである。器高・口径・底径の平均は 2.8cm、15.8cm、10.3cm。195･196 は楠葉型瓦器碗の口縁片。いずれも口縁端部に沈潜をもち、器壁は厚く、遺構の時期まではくだらないものと考えられる。

SK53(Fig22)

SK52 の東側で検出した。SK52 同様、上層に一定単位の土師器が集中する。土師器群堆積層の断面は、わずかにではあるが碗型を呈することから、土坑がほとんど埋没した時点でわずかに残った窪

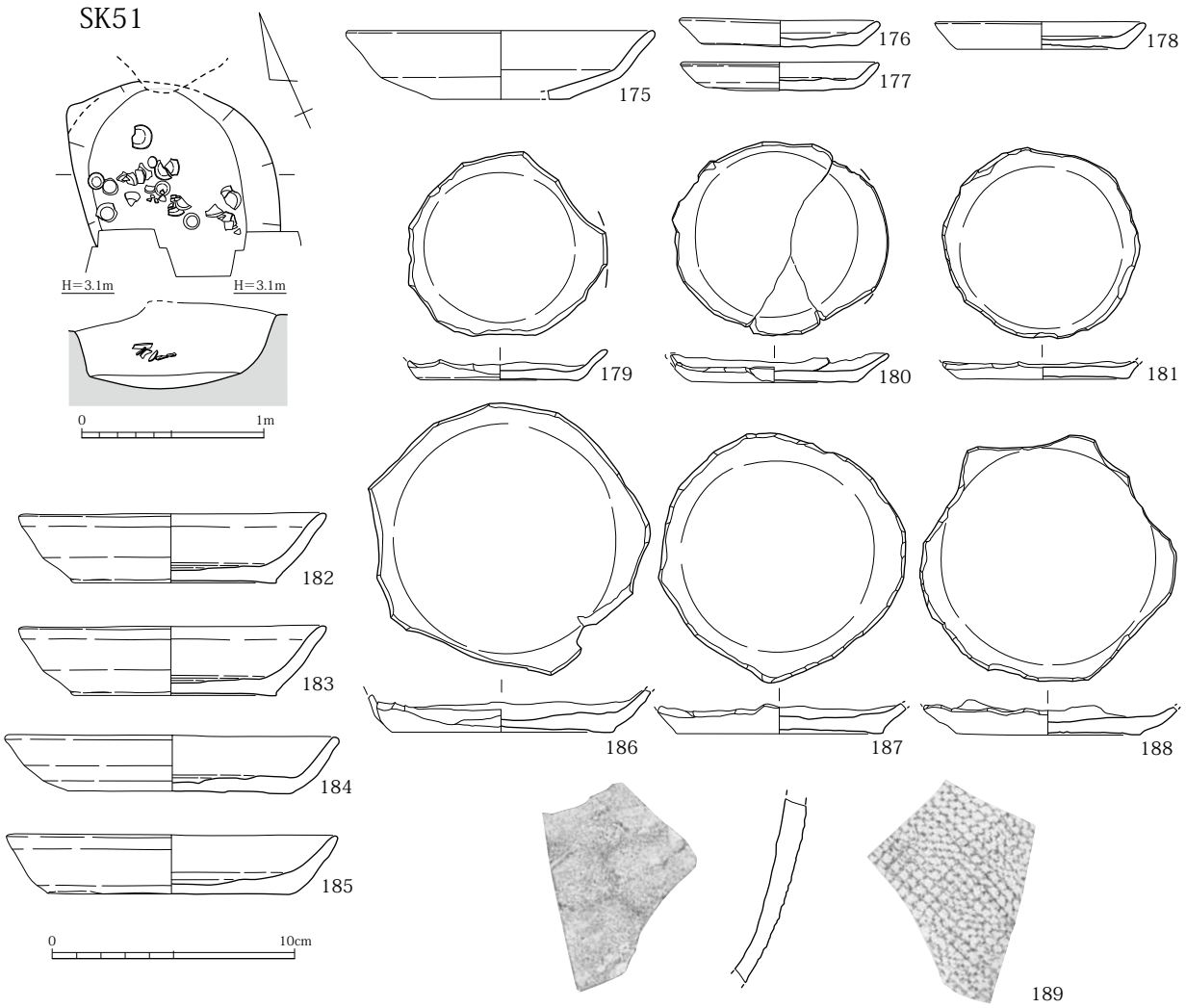


Fig21　SK51 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

み部分に廃棄したことが推察される。土坑は楕円形を呈し断面形は直に立ち上がる。出土した遺物は土師器を主体とし、図化したもの、覆土中出土のものともに糸切りとヘラ切りが混在する。量としては底部糸切りの土師器が若干多い。以上から 12 世紀中頃～後半の遺構と考えられる。

197 ～ 203 は土師器皿である。いずれも底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は 1.2cm・9.5cm・7.3cm である。204 ～ 206 は土師器坏。いずれも底部ヘラ切りで、器高・口径・底径の平均は 2.8cm・15.2cm・11cm である。204 は体部下半に段をもつが、丸底坏に近い器形をもつ。207・208 は筑前型瓦器碗である。ミガキははっきりと確認でき、底部の押し出しも丁寧で、丸底化への意識は強い。

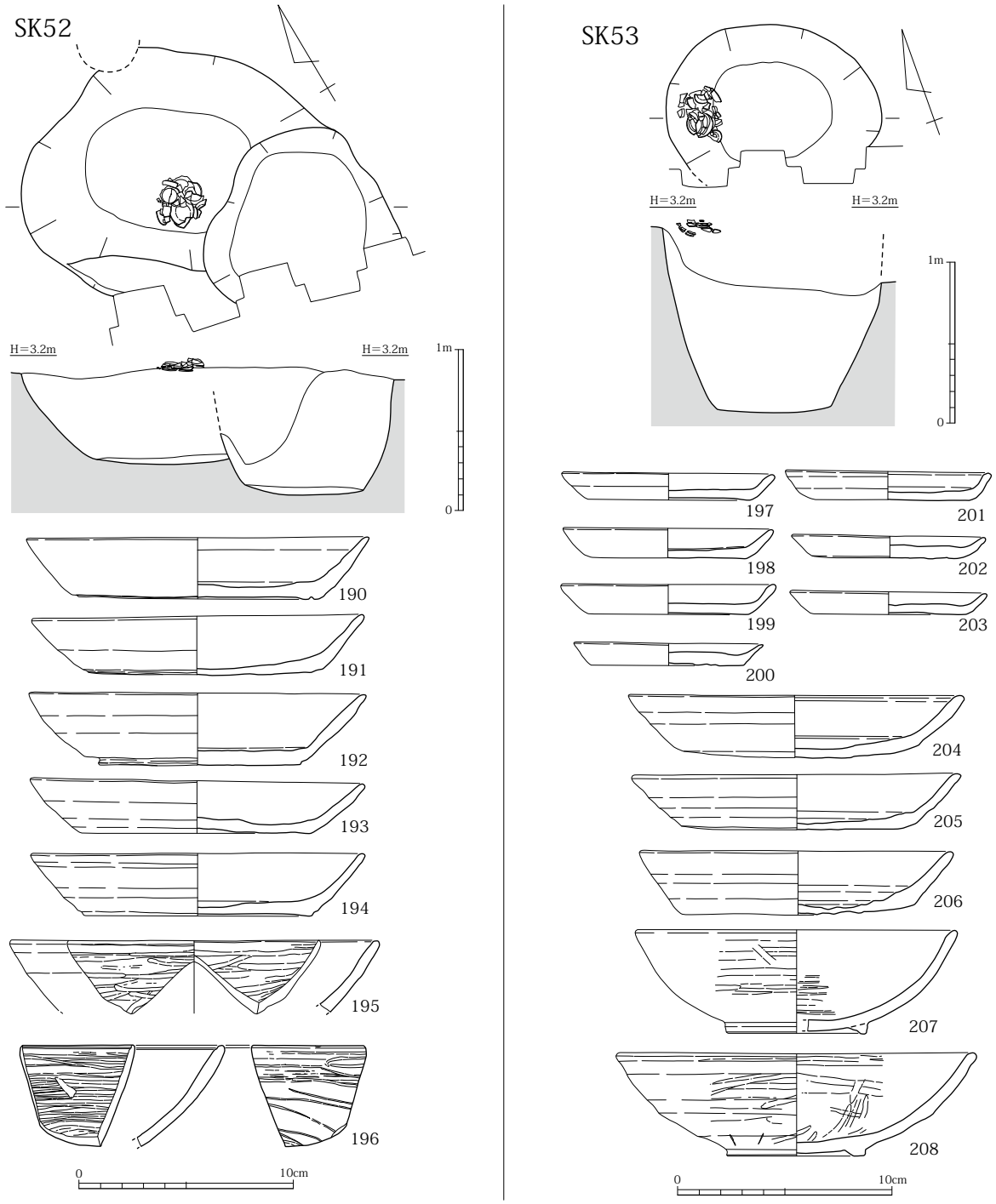


Fig22　SK52・53 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK54(Fig23)

2 面の南側で検出した。径 100cm 程度の平面不正円形を呈する。断面はほぼ直に立ち上がり、深さは 75cm 程度残存する。以下の出土遺物から 13 世紀前半～中頃の遺構と考えられる。

209・210 は龍泉窯系青磁である。209 は蓮弁文を有する碗Ⅱ類である。210 は碗もしくは鉢か。211 ～ 213 は土師器小皿。全て回転糸切りである。法量の平均は器高 1.1cm、口径 9㎝、底径 6.9cm。214 ～ 220 は土師器坏である。全て底部糸切りである。器高・口径・底径の平均は 2.5cm・13cm・9.2cm。221・222 は黒色土器 A 類の碗である。221 は口縁片、222 は底部片。混入資料である。

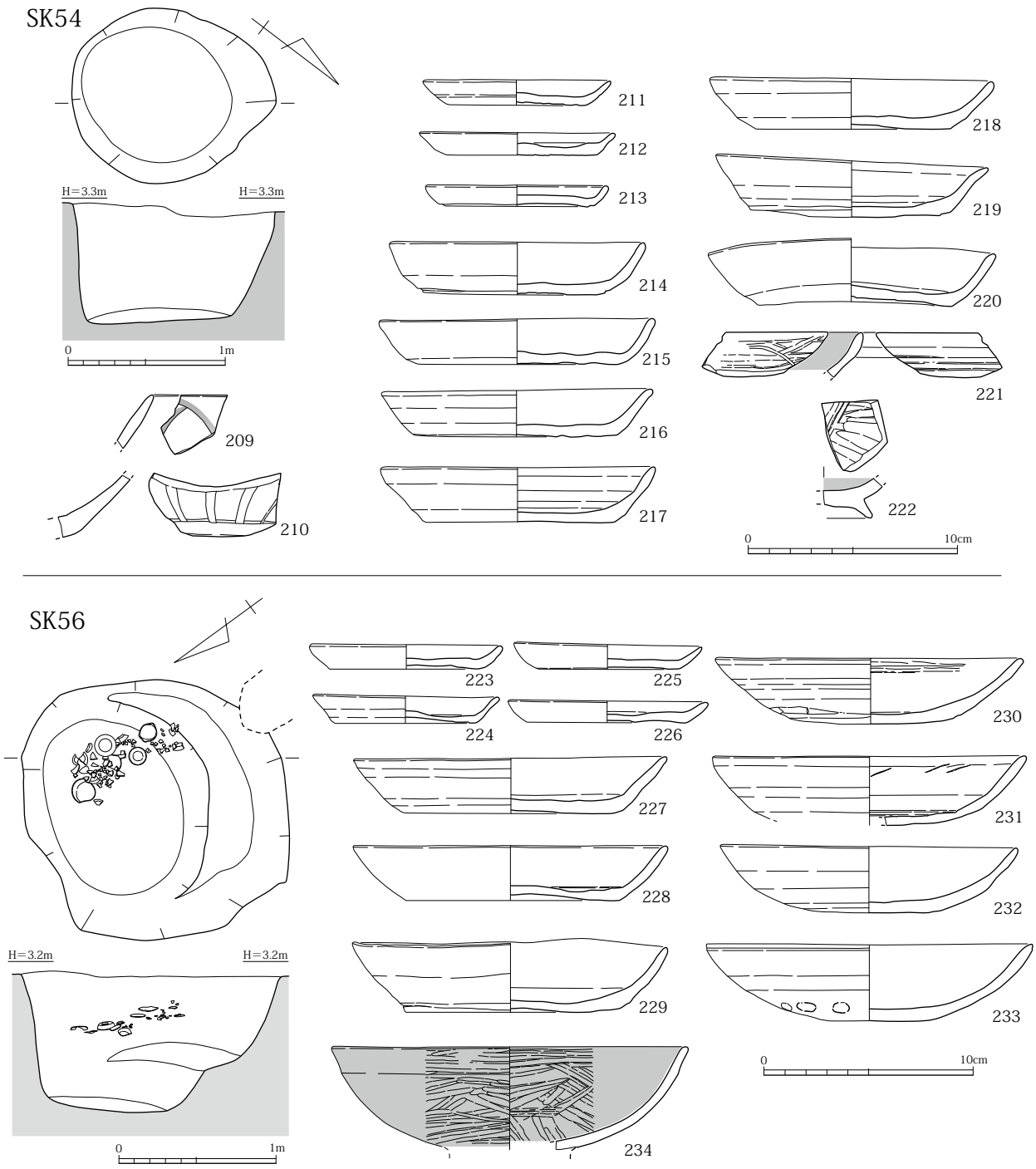


Fig23　SK54・56 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK56(Fig23)

調査区南側、SK54 の西側で検出した。平面は不整形を呈する。断面はやや緩やかではあるが直線的に立ち上がり、南側にはテラス状の段を有する。最深部での深さは 90cm 程度残存する。中層からまとまった数の土師器が出土した。出土状況からみて南側から投棄された状況がうかがえる。以下の出土遺物から 12 世紀中頃～後半の遺構と考えられる。

223 ～ 226 は土師器皿である。全て底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は 1.2cm・9.2cm・7.2cm。227 ～ 229 は土師器坏である。いずれも底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は、2.9cm・15cm・10.3cm。230 ～ 233 は土師器丸底坏である。器高・口径の平均は 3.4cm・14.8cm。234 は黒色土器 B 類の碗である。内外面にミガキの痕跡が残る。

SK59(Fig24)

調査区南西部で検出した。平面は不整形。断面の立ち上がりはほぼ直で､深さは約 95cm 残存する。以下の出土遺物から 12 世紀中頃～後半前後の遺構と考えられる。

235 ～ 237 は土師器皿である。いずれも底部糸切りで、器高･口径･底径の平均は、1cm･8.4cm･6.4㎝である。238 は土師器坏である。底部糸切りで、器高は 3cm、口径は 14.8cm、底径は 9.2cm を測る。239 は瓦器碗である。高台は低く､底部は丁寧に押し出され丸底化する。240 は白磁碗Ⅶ類である。器壁は厚く、内面には片彫りによる草花文を施す。241 は白磁皿Ⅷ類である。242・243 は同安窯系青磁碗である。242 は体部を打ち欠く。243 は大型の碗で、色調は釉が明黄褐色，胎土はにぶい黄橙

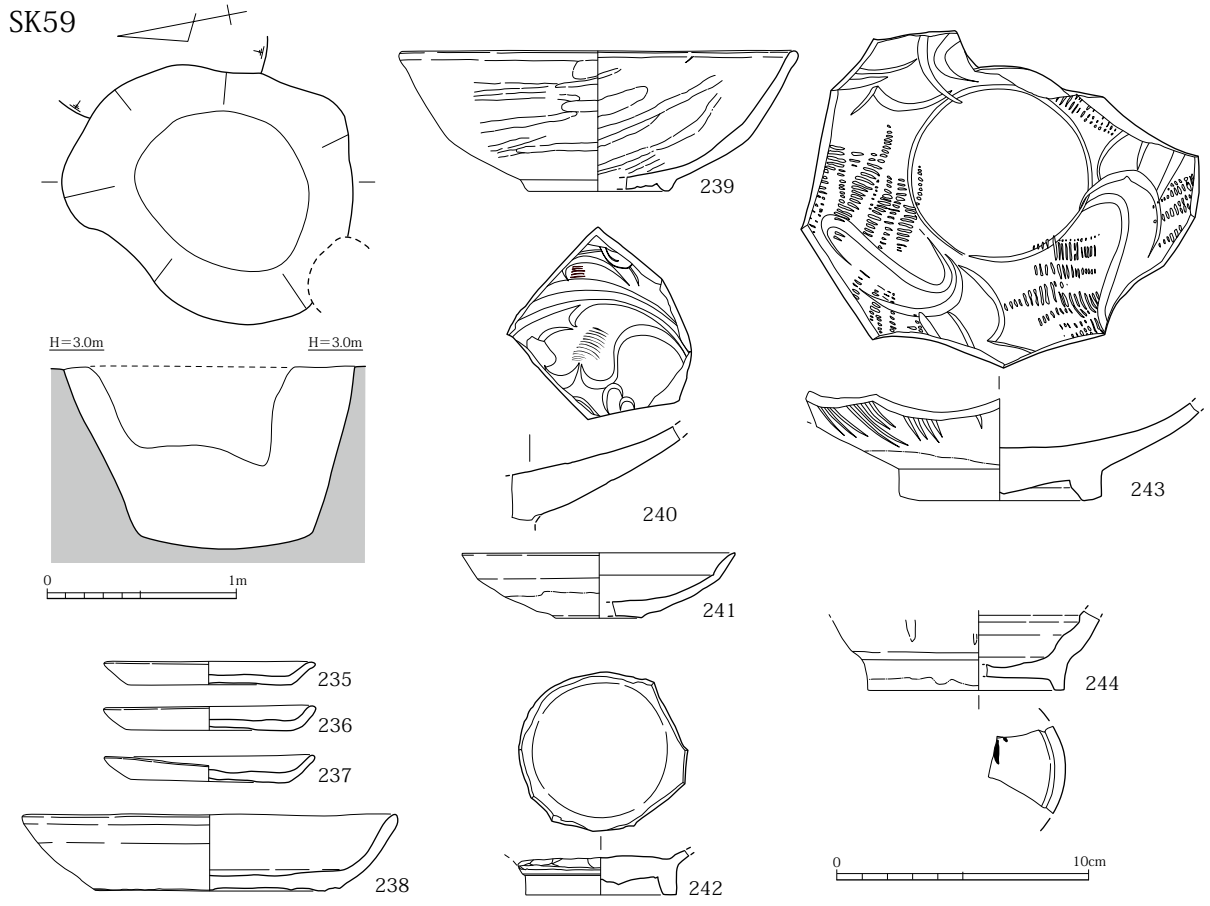


Fig24　SK59 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

色を呈する。外面には櫛目文, 内面には点描文と略化した花文を有する。244 は青白磁である。壺か。外底部には墨書が認められる。

SK61(Fig25)

2 面の調査区中央南寄りで検出した平面不整形の土坑である。南側を攪乱によって切られる。深さは約 55cm 程度残存し、西側はほぼ直に、東側はゆるやかに立ち上がる。中層以下から土師器がまとまって出土した。以下の出土遺物から 13 世紀前半～中頃の遺構と考えられる。

245・246 は土師器皿である。いずれも底部糸切りである。両者の法量の平均は器高 1.1cm、口径 8.4cm、底径 6.5cm。247 ～ 257 は土師器坏で、255 ～ 257 は体部を打ち欠く。すべて底部糸切である。法量に著しい差はないが、器形を大別すれば体部下半に段、もしくは丸みをもち口縁にむかってやや外反しながら立ち上がる 247 ～ 252 と底部から口縁にむかってほぼ直もしくはわずかに内湾しながら立ち上がる 253・254 に分かれる。器高・口径・底径の平均は、2.6cm・13.2cm・9.6cm である。258・259 は龍泉窯系青磁碗である。258 は口縁片である。外面に鎬蓮弁文を有する。259 は体部を打ち欠く。260 は瓦質の捏鉢である。

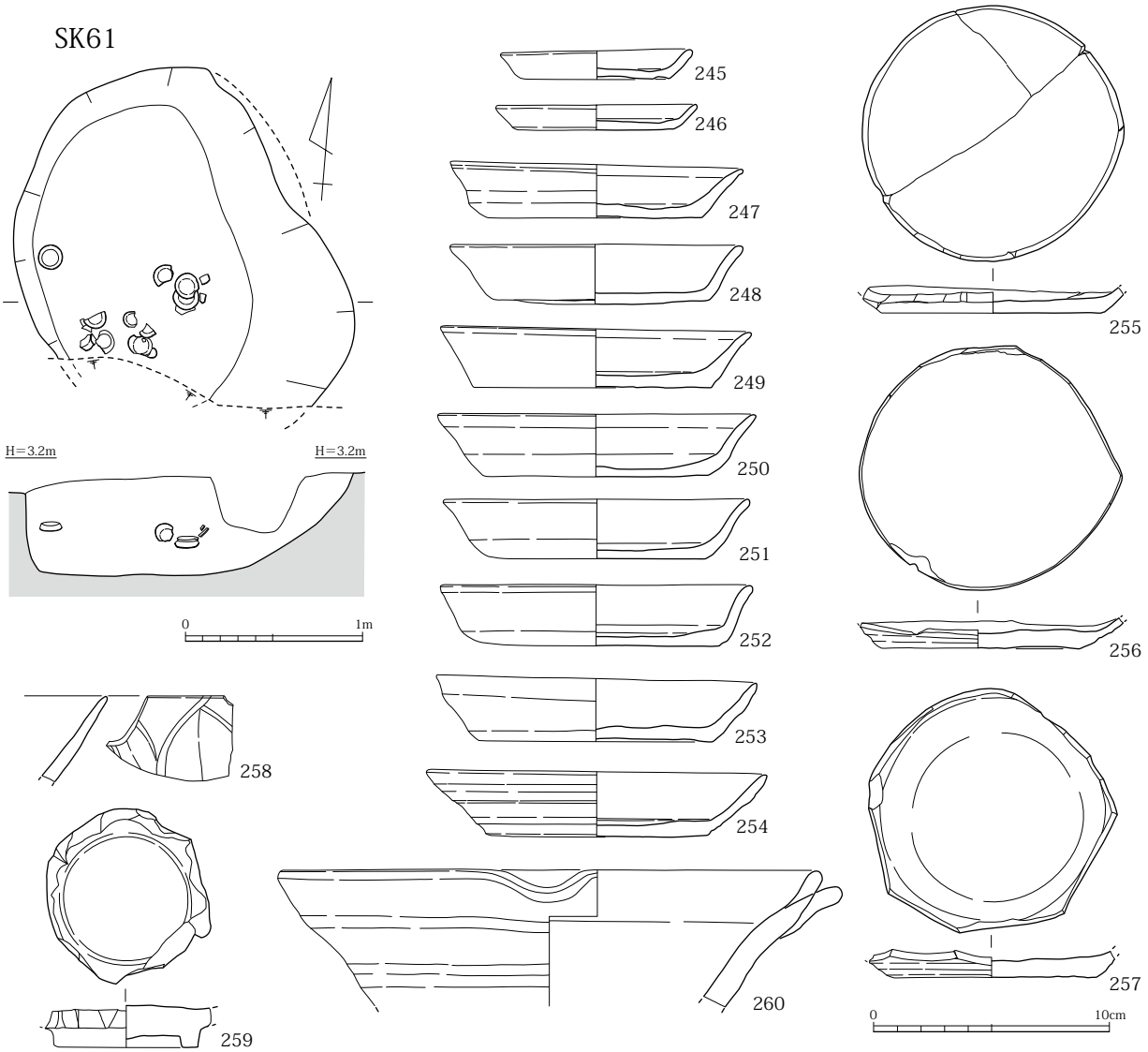


Fig25　SK61 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK62(Fig26)

2 面の調査区西側やや南寄りで検出した。西側の一部をピットに切られる。平面はやや不整形ではあるがほぼ円形を呈し、壁面の立ち上がりは直で、西側および北東側にテラス状の段をもつ。深さは最新部で 100cm 程度残る。ほぼ単一層をなし、覆土中には図化し得ない程度の土器小片が上層から床直上までびっしりと詰まっていた。他の土師器集積遺構とは全く異なり、出土した土師器は土坑に廃棄される段階ですでに小片化しており、それらが一気に埋められたものと推定される。以下図示した遺物は残りがいいものを選別しているため、出土遺物のごく一部である。以下の遺物から 13 世紀前半前後の遺構に比定される。

261 ～ 268 は土師器皿である。いずれも底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は 1.3cm・8.8cm・7cm である。269 ～ 277 は土師器坏である。全て底部糸切り。器高・口径・底径の平均は 2.9cm・13.6cm・9.9cm である。278 は白磁埦である。碗Ⅷ類で、内面見込みの釉を環状に掻き取る。279 は畿内産瓦器碗の底部片である。楠葉型瓦器碗か。高台は低い三角形を呈し、器壁は薄い。ミガキの痕跡は確認できないが、内面は光沢をもつ。炭素の吸着が悪いためか、色調は内外面ともに黄白色を呈する。類例は、近接する 15 次調査で確認されている。280 は羽口である。一部が被熱により灰白色化する。

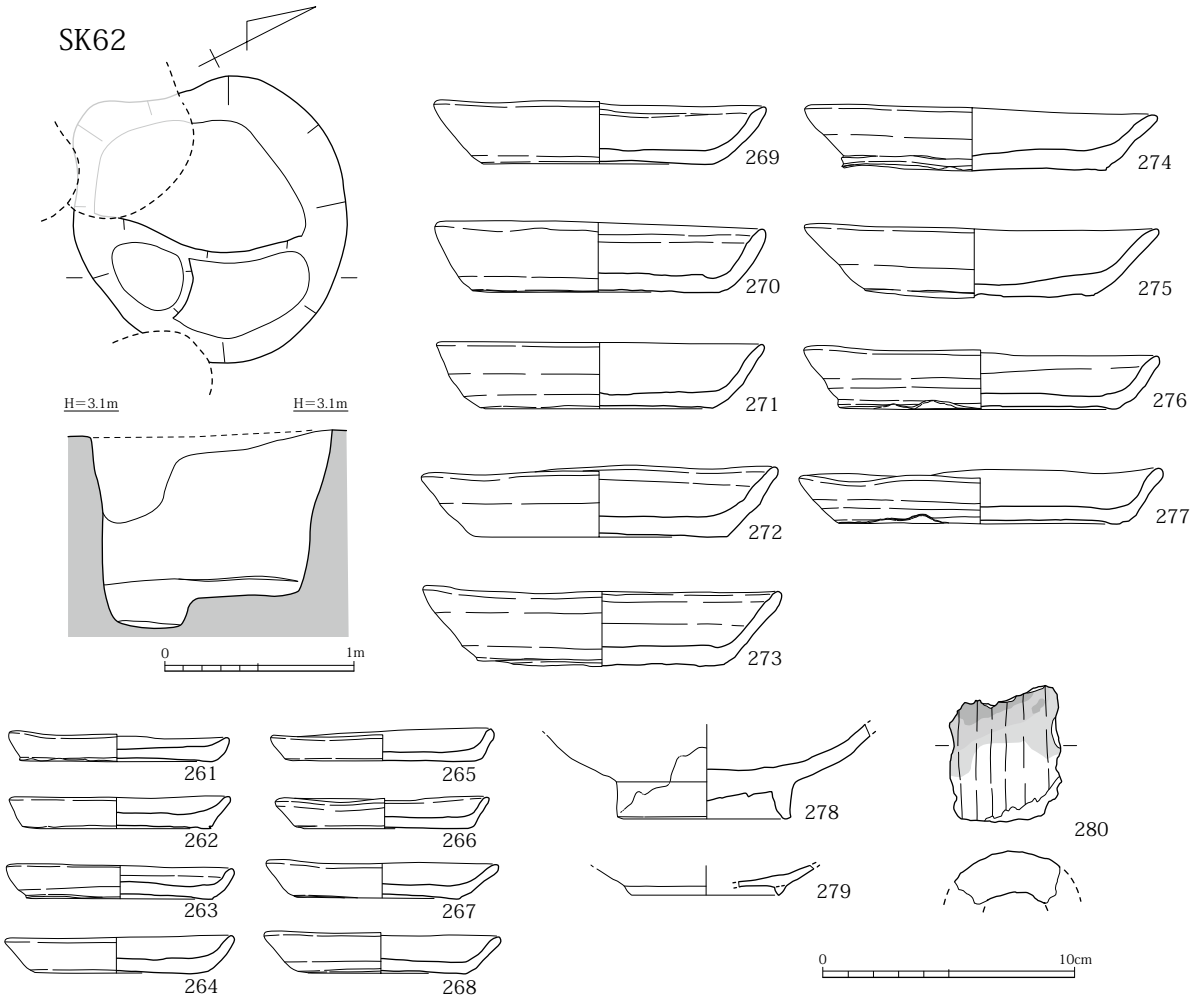


Fig26　SK62 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK63(Fig27)

2 面の南西端で検出した。平面は楕円形を呈し、深さは最深部で約 70cm 残存する。以下の出土遺物と近接する SK59 との関係から 12 世紀中頃～後半前後の遺構と考えられる。

281・282 は土師器皿である。いずれも底部糸切り。底部形態に違いはあるが、法量は近似値を示す。器高・口径・底径の平均は 1㎝・9.3cm・7.2cm である。283 ～ 285 は土師器坏である。全て底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は 2.7cm・14.4cm・10.7cm。286 は白磁埦Ⅷ類である。見込みの釉を環状に掻き取る。高台は厚く、外面の下半を露胎とする。287 は褐釉陶器の碗口縁片である。端部に平坦面を設ける。

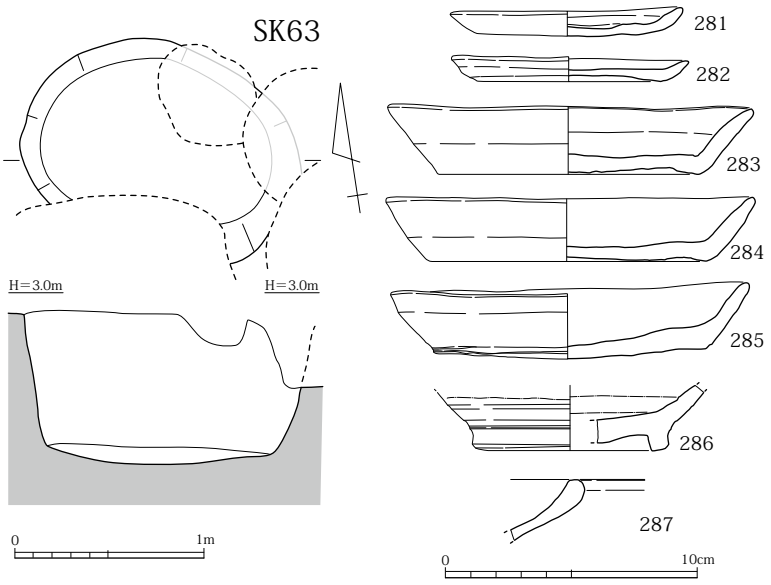


Fig27　SK63 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

遺構覆土・遺構検出時・ピット・包含層出土遺物 (Fig28)

ここでは 1 面・2 面の主要遺構以外から出土した遺物をまとめて報告する。288 は 1 面上整地層中から出土した楠葉型瓦器碗の口縁片である。289・290 は 1 面ピット出土。289 は畿内産の瓦器碗。楠葉型瓦器か。成形に伴うものか、器壁の一部が内側にへこむ。290 は楠葉型瓦器碗である。口縁端部に沈線を有する。291 は 1 面遺構検出時に出土した十瓶山窯系須恵器の小片か。292 ～ 317 は 2 面のピット、遺構検出時、覆土、包含層出土遺物である。292・293 は龍泉窯系青磁碗である。292 はⅡ類の口縁片。293 はⅠ類である。294 ～ 298 は白磁埦である。294・295 は口縁片。296 ～ 298 は底部片。296 は見込みの釉を掻き取るⅧ類である。297 は体部を丁寧に打ち欠く。298 は外底面に墨書を有する。残存部の文字は「成」か。299 は白磁皿である。300 は高麗青磁碗か。体部外面には蓮弁文を有し、高台には目跡を残す。301・302 は陶器盤の破片である。303 は円盤状土製品である。304 は底部糸切りの土師器皿の小片である。底部には墨書を有するが、判読不明。305 も土師器皿の小片。外面に円盤状に煤けた痕が複数観察される。306 は瓦器坏である。押し出しにより丸底化する。外底面には 4 分割のミガキが施され、内面見込み部にはジグザグ状の連続ミガキが複数回施されたことが分かる。307 ～ 311 は瓦器碗である。307 は筑前型瓦器碗。顕著な略化傾向は認められない。308 ～ 311 は楠葉型瓦器碗である。308 は遺構検出時にほぼ同一地点で出土した個体である。接合しなかったため図上復元した。口縁端部には沈線が施され、内面のミガキは非常に密。外面はわずかに隙間が認められるが、顕著な略化は認められない。309 ～ 311 も丁寧なつくりで、口縁端部には沈線が残り、ミガキも隙間が少ない。312 は畿内産瓦器の坏である。外面のミガキは口縁付近の 1/3 程度しか施されず、内面のミガキも隙間が目立つ。313 は須恵器高坏である。314 は管状土垂である。315・316 は羽口である。317 は不明土製品。上面には複数の不規則な指頭痕が残り、底面は平坦面をなすことから、平坦面上で粘土塊を捏ねたものが、何らか理由で火を受けて土製品状になったものだろう。底には墨書状の痕跡が残るが判然としない。

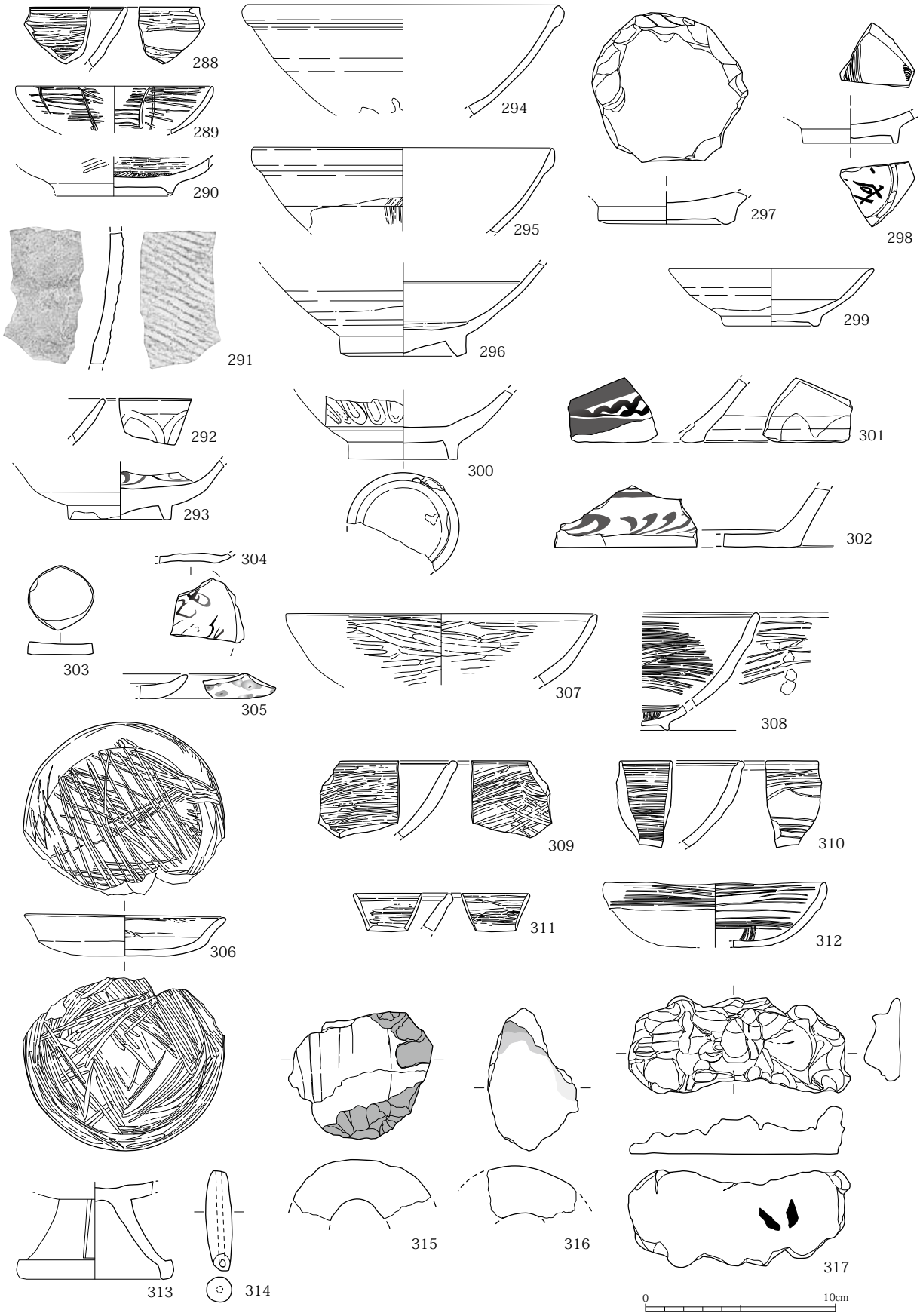


Fig28　1 面および 2 面遺構覆土・遺構検出時・ピット・包含層出土遺物実測図（1/3）

（3）3 面の調査

3 面は黄色砂基盤層上に設定し調査を実施した。この面で調査した遺構の大半は 2 面までに検出できなかった遺構が中心となるが、筥崎宮創建時期に近い遺物を含む遺構や古墳時代の遺構も検出している。

土坑

3 面で検出した主要遺構は全て土坑である。鋳造に関するものと推定される遺構や方形竪穴状遺構が検出されている。

SK22(Fig29)

調査区の中央北西寄りで検出した平面楕円形の土坑である。南東部を SE26 およびピットに切られる。床面でピット状の掘り込みを検出したが、本遺構に伴うものかは不明。以下の遺物のうち遺構図にも図示した土師器は、器形その他の特徴から 10 世紀～11 世紀のものと考えられ、本遺構もその前後に比定されよう。

318 は高台付の碗である。器形は丸みをもち口縁端部付近はわずかに外反する。内面にはコテ当て痕が残るが全体的に丁寧に成形されている。高台はやや外側に張り出す。器壁は光沢をもち、色調は灰黄色を呈する。319 は平瓦片である。外面には斜格子タタキ具痕、内面には布目が残る。

SK23(Fig29)

調査区北端で検出した。北側が矢板打ち込みの際の攪乱で不明だが、平面略方形を呈すると想定される。壁面はほぼ直に立ち上がり、西側にテラス状の段をもつ。深さは 40cm 程度残存し、上層～中層で土師器がまとまって出土した。以下の出土遺物から 12 世紀後半～ 13 世紀前半の遺構と考えられる。

320 は土師器皿である。底部糸切りで、器高 1.1cm、口径 9.1cm、底径 7cm を測る。321 ～ 323 は土師器坏である。いずれも底部糸切りで、器高・口径・底径の平均は 2.9cm・14.8cm・10cm。

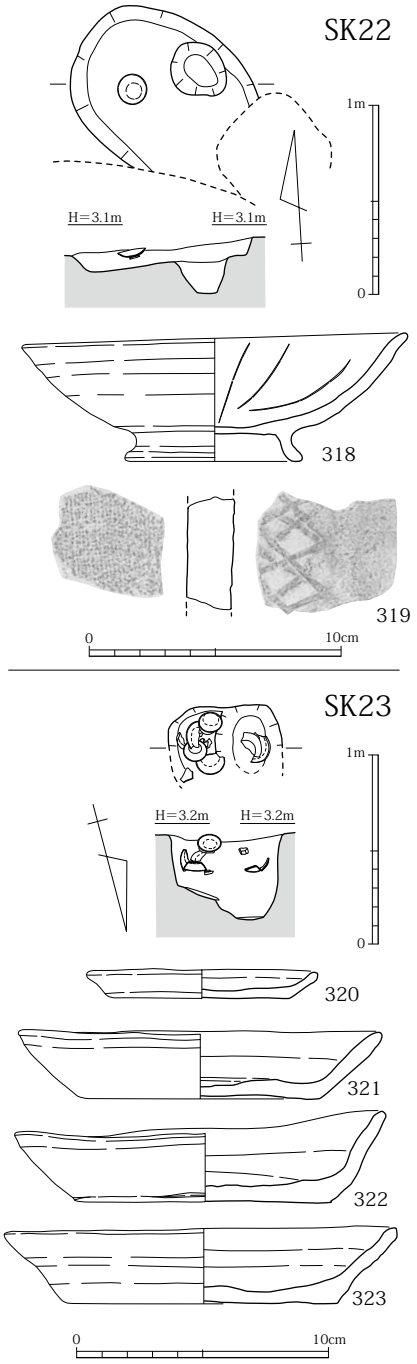


Fig29　SK22・23 実測図（1/40）
および出土遺物実測図（1/3）

SK24(Fig30)

調査区の中央やや北寄りで検出した。西側を SE26 および SK25 に切られる。上層～中層にかけては墨を含む黒色粘砂が、下層にはやや汚れた明褐色砂質土層堆積するが、両層の間、明褐色砂質土直上から鍋状を呈する土製品、および棒状の土製品が出土した。棒状の土製品は遺構の壁面に沿うように鍋状のものは遺構の中心でやや倒れた状態で検出された。注目すべきは、以上の土製品は全く火を受けていないことである。本遺構掘削時の天候は少雨であったが、滞水した土製品は移植ゴテがわずかに当たるだけで傷がつくほど脆くなっており、記録後それ以上の水分を含まないよう養生し、乾かして取り上げた。出土遺物には他に土師器の小片がある。底部糸切り・ヘラ切りの両者を確認してい

るが、時期の特定は困難である。

324 は鍋形の鋳型状土製品である。器壁の厚さは 2.5cm ～ 4cm 程度で。やや外傾しながら直線的に立ち上がる。内底面はほぼ平坦で、壁面沿いはわずかに段をもつ。325 は棒状土製品の一部である。洗浄をしていないため、砂が付着しており、断面はややいびつな方形だが、本来はほぼ正方形を呈していたものと推定される。

SK25(Fig30)

調査区中央やや北寄りで検出した。SK24 を切る。西側は SE26 に切られ、北側は SK24 との切り合いを認識できずに掘削したため残存していない。SK24 の土層観察から本遺構が SK24 を切るということが明らかになった。出土遺物には SK24 同様底部糸切り・ヘラ切りの土師器がある。

326 は土師器皿。底部ヘラ切りで、器高 1.6cm、口径 9.1cm を測る。327 は羽口の小片である。被熱によって一部がガラス質化する。

SK46(Fig31)

調査区の東端で検出した。平面はやや不整形ではあるが、いわゆる方形竪穴状遺構と呼称される土坑である。西側隅には柱穴を有する。矢板沿いで検出し、他遺構に切られることから遺物には混入資料が多いが以下に図示した遺物の他に底部ヘラ切りを主体とする土師器の小片を確認しており 12 世紀前半～中頃の遺構と考えられる。

328 は瓦器碗である。比較的丁寧なつくりで、内外面のミガキも明確に残る。329 は陶器壺の底部である。胎土は灰白色、釉は灰緑色を呈する。

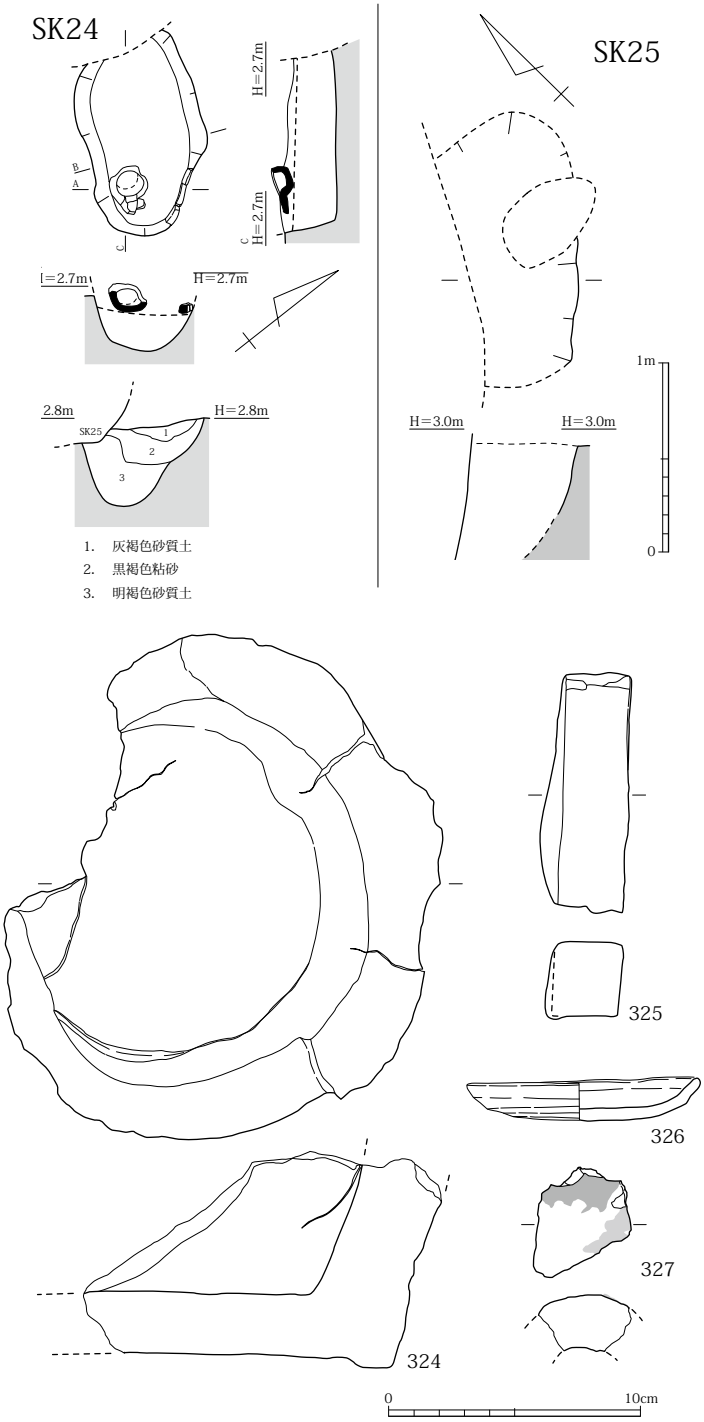


Fig30　SK24・25 実測図（1/40）
および出土遺物実測図（1/3）

SK48(Fig31)

SK46 の北側に位置する方形竪穴状遺構である。両者は切り合い関係にあるものと考えられる。主軸は SK46 に近い。出土遺物には以下の他に高台付の土師器坏などが出土している。

330 は玉縁口縁をもつ白磁埦の体部上半である。331 は羽口である。被熱により部分的に変色する。

SK64(Fig31)

調査区の中央やや南東側寄りで検出した。調査地点で唯一の古墳時代の遺構である。東側半分を攪乱によって切られ、平面の詳細は不明。断面は碗型を呈し、残存部で 25cm を測る。図示したとおり、床面直上から小型丸底壺が出土した。以下の遺物から古墳時代中期前半～中頃の遺構と考えられる。

332 は小型丸底壺である。いわゆる粗製品で外面にはハケ目が残る。口縁は短くやや外傾しながら立ち上がり、胴部最大径は口径を上回る。333 は土師器高坏である。坏部の下半で強く屈曲し、外側に開きながら立ち上がる。器壁は摩耗が著しい。

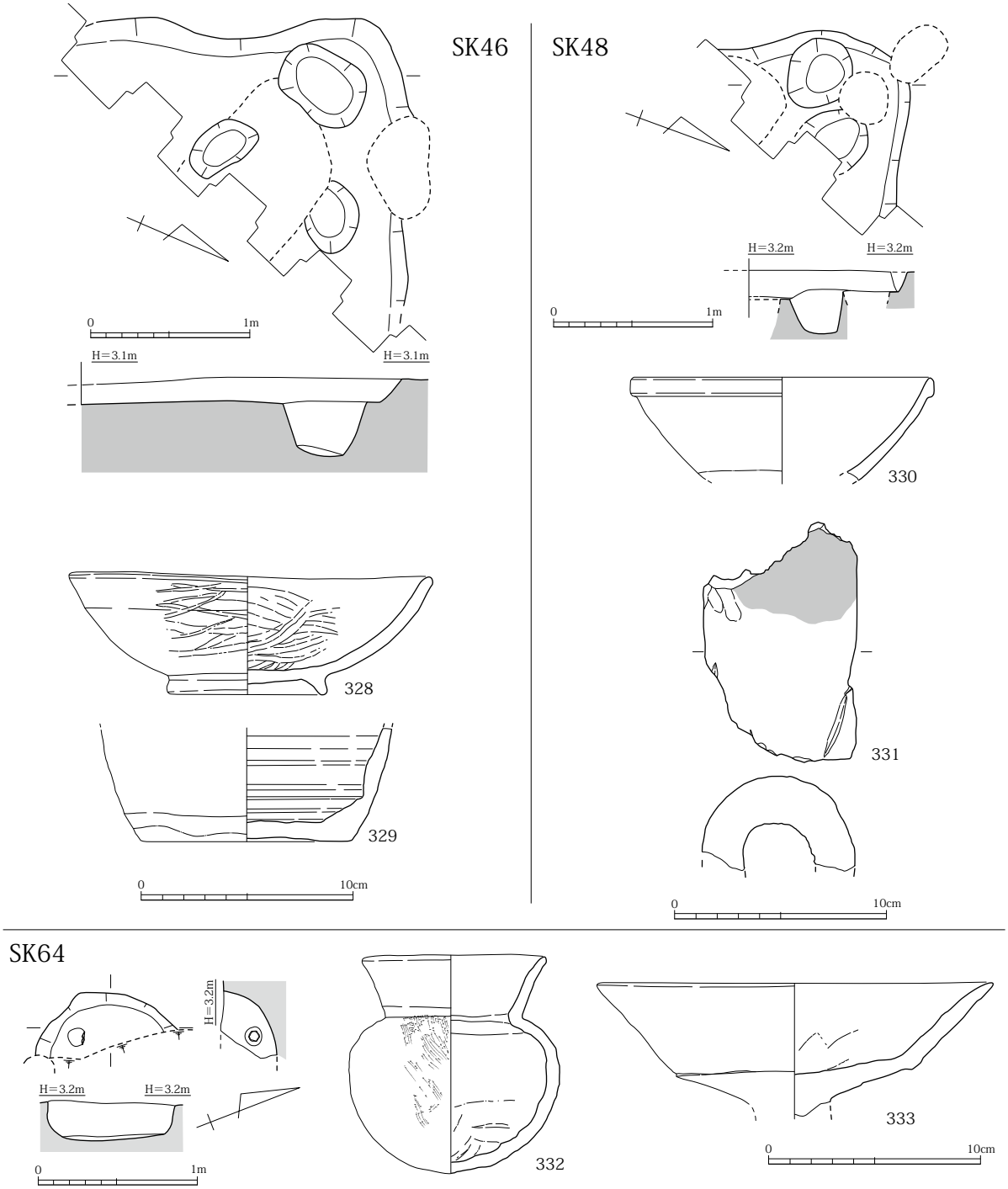


Fig31　SK46・48・64 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

包含層・遺構検出時・ピット出土遺物 (Fig32)

ここでは３面上包含層、および３面遺構検出時出土遺物、３面ピット出土遺物をまとめて報告する。334 は白磁埦である。内面の釉を環状に掻き取るⅧ類である。体部を丁寧に打ち欠いたもので、外底面には墨書を施す。335 は土師器の高台付碗である。内外面ともに密なミガキが施され、外面の下半には規則的に指頭痕が残る。焼成は良好で、色調は浅黄色を呈する。336 は土師器碗である。体部下半は稜を有するが丸みをもち、中位で内側に強く屈曲して口縁へと立ち上がる。337・338 は黒色土器 A 類である。339 は須恵器高坏の脚部である。340 は須恵器坏身の口縁片。器壁は薄く口縁端部にはわずかに稜をもつ。341 は土師器壺である。肩は張り、口縁はやや内傾しながら直に立ち上がる。外面はやや雑なハケ目、内面はケズリによって仕上げる。体部には穿孔を施す。342 は土師器甕である。頸部は「く」の字を呈し、口縁は端部にむけて細くすぼまりながら立ち上がり、端部外側につまみ出す。343 は土鈴である。

（4）その他の出土遺物

本調査地点で出土したその他の出土遺物として、石製品、金属製品、攪乱出土遺物をまとめて報告する。

石製品

本調査地点からは滑石製品を中心とした石製品が複数出土している。344 は滑石製石鍋である。SK31 から出土した。345 は滑石製の温石か。平面はほぼ正方形を呈し、中心部に穿孔を施す。丁寧

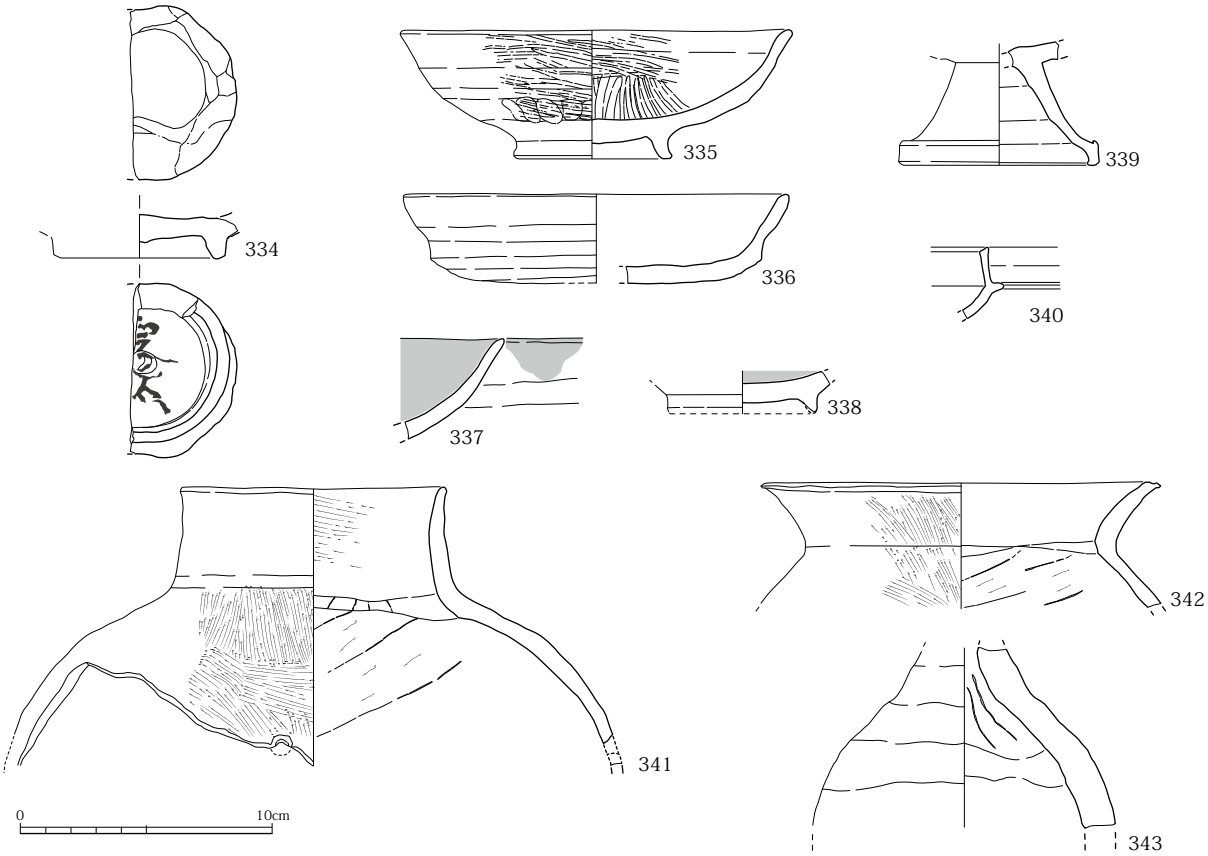


Fig32　３面遺構覆土・遺構検出時・ピット出土遺物実測図（1/3）

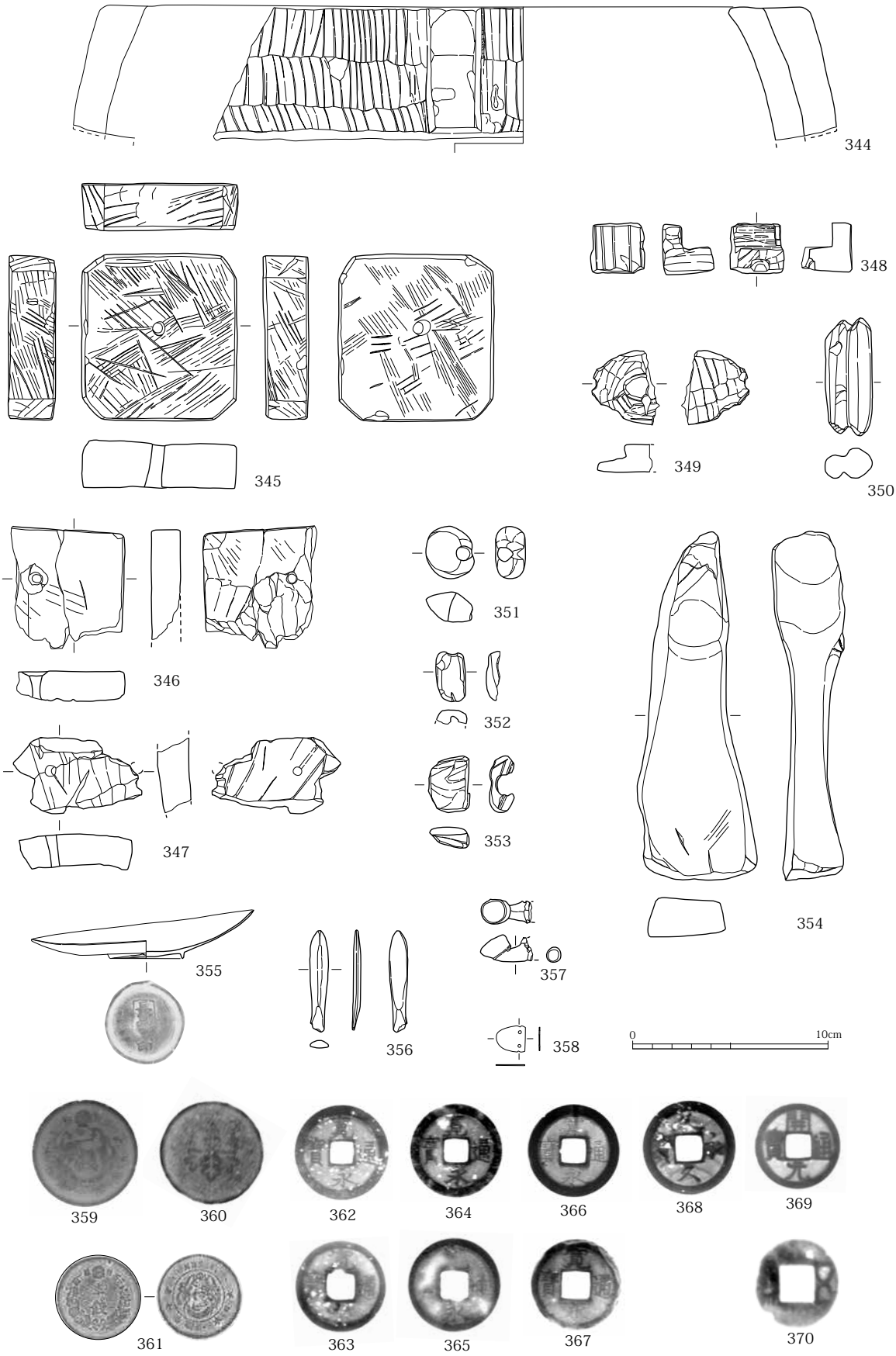


Fig33　出土石製品・金属製品実測図（1/3）および銅銭 X 線写真・拓本 (縮尺任意)

なケンマで仕上げられており、四隅の面取りも丁寧である。石鍋などの転用品ではなく、専用として作られたものであろう。346・347 も温石か。347 は断面がわずかに湾曲する。石鍋の転用品であろう。348 は用途不明の滑石製品である。石鍋の転用品で、断面「く」の字状の形を呈する。349 は滑石製のバレン状石製品である。穿孔は確認できない。350 は滑石製の石錘である。351 ～ 353 も石錘か。いずれも穿孔を施す。354 は砂岩製の砥石である。

金属器

355 は青銅製の皿である。器形は大きくゆがむ。外底面には刻印が認められ、「長■印」と読める。356 は不明青銅製品である。357 は青銅製の雁首である。358 は小鉤である。359 ～ 370 は銅銭である。大半が近世以降のものである。359・360 は大正時代の銅銭である。359 は一銭、360 も一銭か。361 は明治時代の半銭である。明治七年と読める。362 ～ 367 は寛永通宝である。368 は文久永宝である。裏面に波形が刻まれる。369 は開元通宝である。370 は五銖銭である。これら以外にも、個別には取り上げていないが、用途不明の板状鉄製品が出土している他、各遺構からまとまった量の鉄滓が出土している。

攪乱出土遺物

本調査地点で攪乱として扱ったものは 1 面および 1 面上整地層上から掘り込んだものであるが、時期は上記の銅銭が示す近世～近代の遺物が多く、SE01 と同時期、もしくは近い時期と考えられることから、近世～近代の「遺構」とするべきかもしれない。これらの攪乱のうち、遺物がまとまって出土しているものにはそれぞれ番号を付している。紙幅の都合上ここで全てを報告することはできないが、いずれまとめて報告して、その責を果たしたい。ここではそのごく一部を挙げておく。

371 ～ 373 は肥前系の磁器である。371 は染付碗である。江戸時代後期に主流となるいわゆる広東碗で、文様は線描きによって描かれる。372 は 371 とほぼ同時期の蛇ノ目凹形高台をもつ皿である。373 は青磁碗である。外底面には二十枠内に崩れた渦福の銘款をもつ。374 は紅皿である。

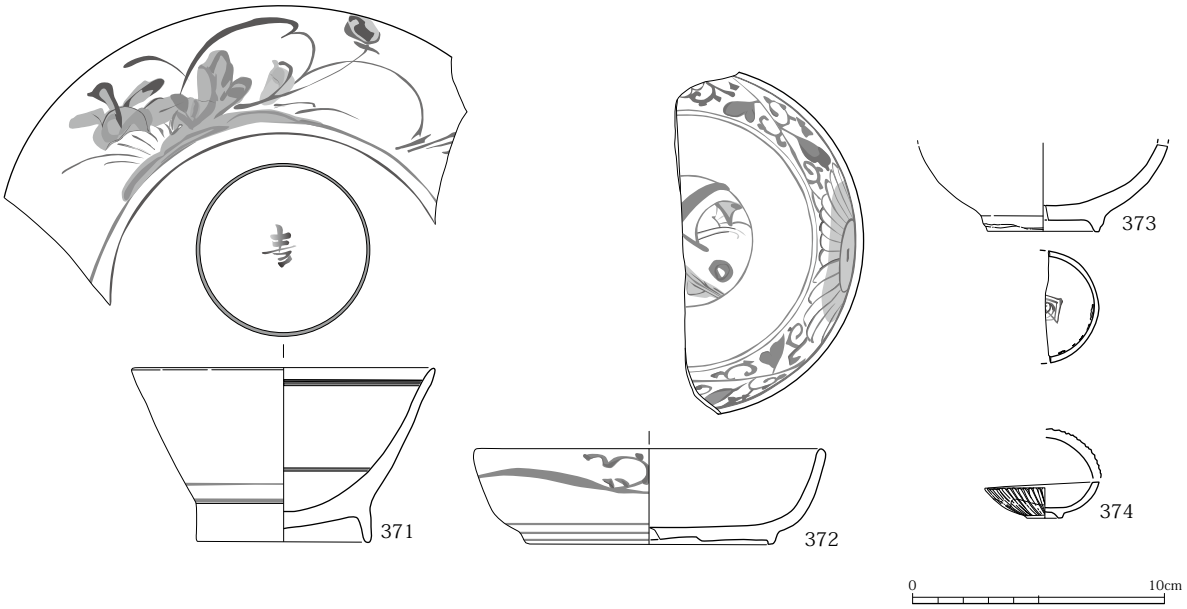


Fig34　攪乱出土遺物 (1/3)

Ⅲ　小結

最後に第 78 次調査の成果について、特に注目すべき点を個別に取り上げつつ、既往の調査と比較しながらまとめたい。

遺構の消長

箱崎遺跡では、弥生時代後期前後に散発的にではあるが遺構が営まれるようになり、古墳時代以降に集落的な様相がより強くなる。当初の遺構は砂丘の発達の関係もあろうが、遺跡の東側緩斜面を積極的に利用したようで、南北方向に遺構群が展開する。既往の調査結果から、初頭以降に一斉に生活遺構が出現し、古墳時代前期を中心として集落が営まれるということが分かる。この遺構群の存続期間は短く、中期以降集落は徐々に衰退するようである。本調査地点で検出された SK64 は古墳時代集落末期の遺構であろう。混入資料としてやや時期が下る須恵器の小片が出土しているが、これに伴う遺構は検出されず今後の調査成果に期待したい。

遺跡では、古墳時代以降、数世紀にわたって場の利用が放棄され、再び遺構が出現するのは筥崎宮創建期の 10 世紀とされている。本調査地点で検出された SK64 以降の古い遺構は SK22・SK34・SK41 である。これらは 10 世紀～ 11 世紀前半に帰属し、遺跡全体からみた遺構の消長と符号する。また、これ以外にも調査地点の各遺構や包含層からは、黒色土器 A 類を典型とする該期の土器片が多数出土している。本時期の遺構は本調査地点も含む筥崎宮の南東部の比較的限定的な範囲で検出されており、はじめに述べた出土遺物から、一般的な集落とは異なる性格をもつと考えられる。

箱崎遺跡における遺構の増加は次代以降に著しく、11 世紀後半～ 12 世紀前半にかけて遺構が徐々に増加し、12 世紀中頃～ 13 世紀には遺跡内の全体に遺構が営まれるようになる。この遺構の爆発的な増加には、同時期に国際貿易都市として急成長する博多遺跡群の直接的な影響があることは出土遺物における陶磁器の割合からも明らかである。本調査地点における遺構のピークもまさにこの時期であり、検出した大半の遺構は本時期のものである。特に多いのは、土師器集積遺構である。

本調査地点で検出される中世期の最も新しい遺構は 13 世紀代までで、その後、遺構から人跡がうかがえるのは近世後半をまたなければならない。遺跡内では、中世後半の遺構の検出割合が前代に比して著しく減少することから、都市としての機能が消失したとされる傾向が強い。これに関しては、近年の調査の結果から、中世後半の集落の中心が、調査地点が少ない遺跡の北西側に移る可能性や、現地表下の極めて浅い部分に本来残存していた中世後半の遺構が、近現代の掘り込みや削平によって失われている可能性が指摘されている。本調査地点についても、上記の理由を当てはめて考えることもできようが、後述する遺構・遺物の検出状況からそれらの理由とは全く異なる要因も考えられる。

検出遺構について

上記のとおり、本調査地点でも他の調査地点同様、11 世紀後半以降に遺構が増加するが、周辺の調査地点とは遺構の分布が異なることが指摘できる。周辺では都市化に伴う人口の急増及び集落・屋敷地の継続を示すように、生活遺構の典型である井戸が著しく切り合った状態で検出されるが、本調査地点での井戸の検出は 2 基のみにとどまる。対して土師器の集積遺構は、規模の大小はあるものの 12 基を検出しており、周辺の調査地点と比較しても突出している。近接する 12 次調査などでは井戸が集中的に検出されていることから、単に場の利用の違いともとれるが、いずれにしても一帯の

特殊性は指摘できよう。最も古いものは、底部ヘラ切りの土師器のみ出土する SK34 である。覆土中に焼土を含み、土師器の量も少なく、性格が異なる可能性はあるが同一の遺構として挙げている。次代のものとして底部ヘラ切りと糸切りの土師器が混在する SK10・SK31 がある。これら以外の土師器集積遺構はいずれも底部糸切りの土師器のみで構成されるもので、法量から 12 世紀後半～ 13 世紀に位置付けられる。本時期が土師器集積遺構の中心であるといえよう。

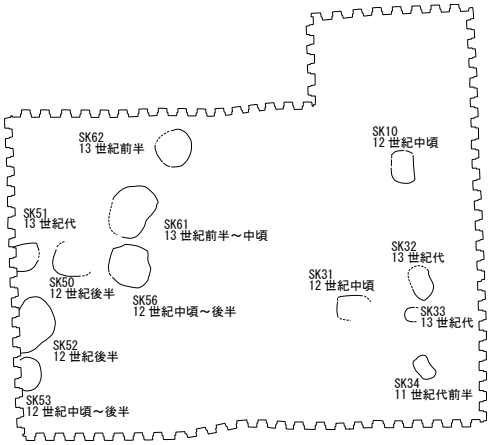


Fig35　土師器集積遺構配置図 (1/300)

出土遺物について

土師器集積遺構が多いことから、必然的に出土遺物における土師器の割合は非常に高くなるが、注目すべきは、その他の遺構や包含層出土遺物なども含めた出土遺物全体からみても土師器の割合が非常に高いことである。箱崎遺跡の中心時期と考えられる 11 世紀後半～ 13 世紀は、「白磁の時代」、「青磁の時代」と形容されるように、周辺調査地点においては遺構の時期比定にあたり陶磁器を基準にできるほどの量の輸入陶磁器が出土しているが、本調査地点ではそれが困難なほど少ない。対して、目立つのは楠葉型瓦器碗を典型とする畿内産の瓦器碗で、出土量は既往の調査の中で最多である。このうち、楠葉型瓦器碗と判断したものは、周辺や博多遺跡群同様Ⅰ期・Ⅱ期の範疇におさまるものと考えられ、筥崎宮が石清水八幡宮の別宮になった時期と重なり、そうした歴史的事象を反映したものだろう。Fig36 は箱崎遺跡における畿内産土器の分布を記した図である。これをみると、78 次調査付近では楠葉型瓦器碗が集中的に出土していることが分かる。以上から、78 次調査地点付近は筥崎宮に極めて関係が深い地点であったことが推察され、次代に増加する土師器集積遺構もこのような状況の中で考えると興味深い。

また、その後中世後半以降の遺構が全く検出されないことについても、筥崎宮との関連で考えられる可能性がある。本調査地点の西側約 150m 前後の筥崎宮の北側隣接地では、中世に遡る遺構が全く確認されない部分があるが、この理由としては筥崎宮創建以来、長らく宮域内であった可能性が考えられる。つまり、中世後半以降、単に一帯の土地利用が放棄されたわけではなく、宮域内に取り込まれた結果、明確な遺構が確認できないという結果になっているのだろう。

以上、本調査の成果を簡単にまとめたが、その他、生産関連遺物など言及すべき点は数多くあり、これについては今後の課題としたい。

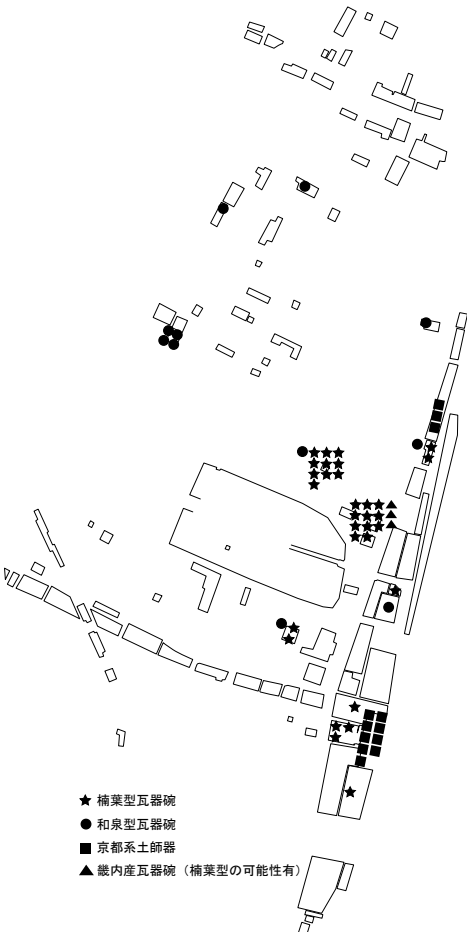


Fig36　畿内系土器の分布 (1/10,000)

PL1

1　調査第１区１面全景（南東から）

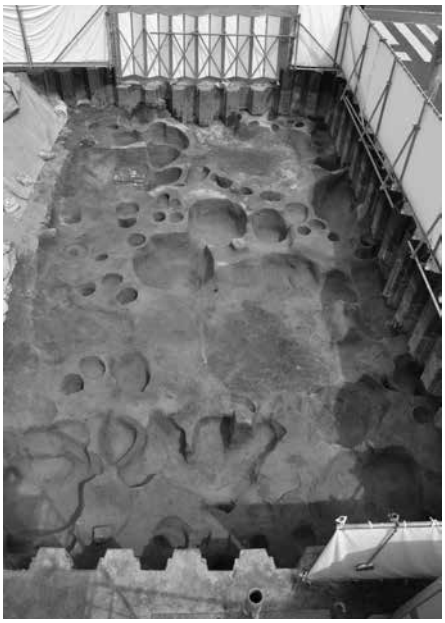
2　調査第１区２面全景（南東から）

3　調査第１区３面全景（南東から）

1　調査第２区２面全景（北西から）

2　調査第２区３面全景（北西から）

3　調査第３区２面全景（北西から）



4　調査第３区３面全景（北西から）

PL3

1　1 面上整地層（道路状遺構）検出時（西から）

2　SD02（道路側溝）（西から）

3　SK03・04 土層断面（南東から）

4　SK31 遺物出土状況（北から）

5　SK33 遺物出土状況（北東から）

6　SK50 遺物出土状況（南から）

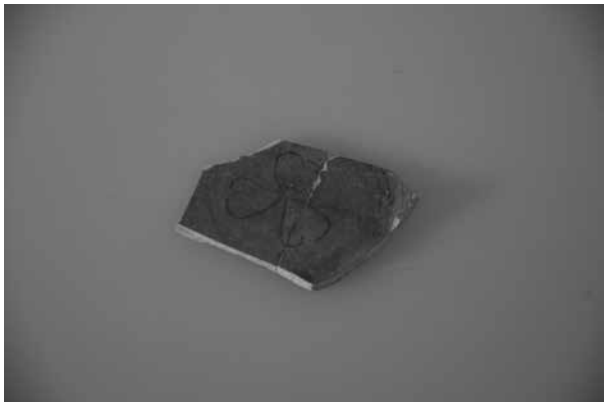
7　SE65 完掘状況（南西から）

8　SK64 遺物出土状況（北東から）

1　SK10 出土遺物（47）

2　SK10 出土遺物（65）

3　SK14 出土遺物（71）



4　SK32 出土遺物（111）

5　SK22 出土遺物（318）

6　SK24 出土遺物（324）

7　SK64 出土遺物（332）

8　攪乱出土遺物（372）

報告書抄録

ふりがな	はこざき56
書名	箱崎56
副書名	箱崎遺跡第78次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1346集
編著者名	中尾祐太
編集期間	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	平成30年3月26日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				㎡	
箱崎遺跡第78次（はこざきいせきだい７８じ）	福岡市東区箱崎1丁目（ふくおかしひがしくはこざき１ちょうめ） 2032-2（２０３２－２）	40131	2639	33.61.48	130.42.48	2016.1.25 ～ 2016.5.24	270	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箱崎遺跡	集落跡	中世	土坑、井戸、柱穴	陶磁器、土師器、瓦器、生産関連遺物（羽口等）	

要約	対象地は箱崎遺跡の南東部に位置し、遺跡の展開に大きな影響を与えた筥崎宮に近接する。周辺では古墳時代以降の遺構が検出されているが、本調査地点でも古墳時代の遺構の他、筥崎宮創建期前後に比定される遺物を多数検出している。 遺跡の中心は12世紀～13世紀で、本調査地点でも本時期に属する遺構が最も多いが、井戸に代表される生活遺構より、むしろ非日常的な土師器の集積遺構が目立つ。また、11世紀後半以降の楠葉型瓦器が多数出土しており、これらの遺構・遺物および上記の立地から、一帯は一般集落とは異なり、筥崎宮関連の場であったと推定される。 遺物には土師器や瓦器、陶磁器の他、鞴の羽口や鋳型状の土製品が出土している。ここからも特殊な状況がうかがえよう。

箱崎 56

箱崎遺跡第 78 次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1346 集

2018 年 (平成 30 年)3 月 26 日

発行　福岡市教育委員

福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1

印刷　みやざき印刷

福岡市早良区祖原 14 － 19